

平成9年度

おお ぞの い せき
大 園 遺 跡

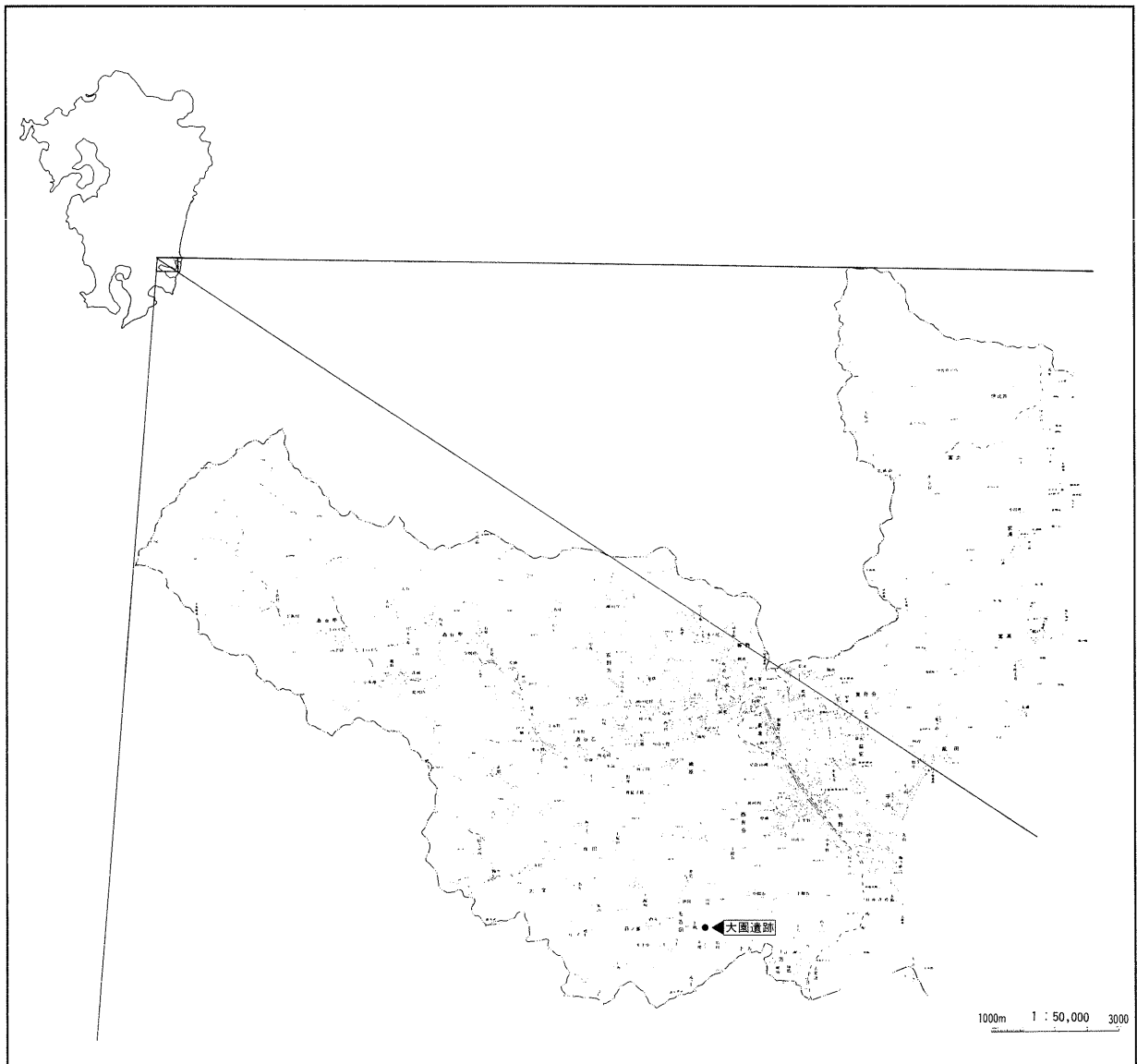
農村資源活用農業構造改善事業日南市都市農村交流
センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1998. 3

日南市教育委員会

おお ぞの い せき
大 園 遺 跡

農村資源活用農業構造改善事業日南市都市農村交流
センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



1998. 3

日南市教育委員会

序

この報告書は、農村資源活用農業構造改善事業日南市都市農村交流センター建設に伴い平成7年度から平成8年度にかけて日南市教育委員会にて調査を実施した大園遺跡の報告書です。

日南市においては、各種開発事業の実施に先立ち、埋蔵文化財の有無について確認調査を実施しており、文化財の保護とその啓発に努めています。

今回の調査では、弥生時代終末期を中心とした竪穴住居跡の集落や土坑、掘立柱建物等の遺構を検出することができました。出土した遺物についても、弥生時代終末期の土器を中心として縄文時代後晩期の土器や石器、古墳時代初等に比定される小型丸底壺やミニチュア土器など多時代のものが発見されました。

「大園遺跡」が存在する海拔約15メートルの丘陵から直線距離にして約2.1kmの地点には県指定史跡「細田古墳」が存在します。今回、細田地区においてこういった古墳が存在する時代に先行する弥生時代終末期を中心とした遺跡が発見されたことは、この地域の歴史や生活、文化等を解明するうえで、一光を与えるものだと思います。

日南市内では、平成7年度に実施した「影平遺跡」において、弥生時代中期を中心とした集落が初めて発見されました。今回の調査では、それに続く弥生時代終末期の集落が発見されたことで、当市における弥生時代の研究が点から線へと展開されていくことが期待されます。更に、南那珂地域における弥生時代の研究をより深めていく上でも貴重な資料となることが期待されます。

この報告書が、学術資料としてはもとより文化財への理解と認識をより深める一助となり、生涯学習や教育の場等において幅広く活用されれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、調査にあたりご指導、ご協力戴きました宮崎県教育委員会文化課、県埋蔵文化財センターを初め、ご支援いただいた関係各位、地元の方々、調査に参加された作業員の方々に深くお礼を申し上げます。また、「高知県佐川町 佐川地質館」の溝渕氏と「宮崎県立博物館」学芸課の伊東氏には、ご多忙の中、化石の鑑定に関しまして貴重なご指導、ご助言を賜りましたことを紙面上ではありますが、深くお礼を申し上げます。

平成10年 3 月

日南市教育長 野 邊 行 俊

例 言

1. 本書は、農村資源活用農業構造改善事業日南市都市農村交流センター建設に伴い1996年に実施された埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、日南市教育委員会が主体となり、日南市農政課より分任を受け行った。
3. 調査の体制

[平成7年度] (本調査実施)

調査主体	日南市教育委員会	
	教 育 長	野邊 行俊
	社会教育課長	岩切 秀明
	文 化 係 長	岡本 武憲
庶務担当	主 事	長友 恵子
調査担当	主 事	的場 文明
調査補助	佛教大学学生	和田るみ子
	調 査 補 助 員	鎌田留次郎、鎌田和枝、黒木正男、黒木カヨ、田畑フミ子、 前田マサ子、福田スエ、大田原俊太郎、谷口キヨ子、酒井和枝 樋口幸子、得能綾子、阿万ミツエ、熊本ハツ子、熊本多津子 藤本千子 他

[平成8年度] (7年度からの調査を継続して実施)

調査主体	日南市教育委員会	
	教 育 長	野邊 行俊
	社会教育課長	藤原 英一
	文 化 係 長	岡本 武憲
庶務担当	主 事	長友 恵子
調査担当	主 事	的場 文明
調査補助	佛教大学学生	和田るみ子
	調 査 補 助 員	鎌田留次郎、鎌田和枝、黒木正男、黒木カヨ、田畑フミ子、 前田マサ子、福田スエ、大田原俊太郎、谷口キヨ子、酒井和枝 樋口幸子、得能綾子、阿万ミツエ、熊本ハツ子、熊本多津子 藤本千子 他

[平成9年度] (整理作業及び報告書刊行)

調査主体	日南市教育委員会	
	教 育 長	野邊 行俊
	社会教育課長	藤本 統雄
	文 化 係 長	岡本 武憲
庶務担当	教育総務課主事	平原 千鶴子
調査担当	文 化 係 主 事	的場 文明
整理作業	佛教大学学生	和田るみ子
	整 理 作 業 員	貴島芳栄、谷口キヨ子、出口美智子、谷山英子 他

4. 現地調査は、的場が行った。
5. 現地における実測は、的場、和田、鎌田(留)、谷口が行った。
6. 遺物・遺構の実測及びトレースは、的場、和田、谷口が行った。
7. 本書においては、遺構の略記号として、住居跡はSA、堀立柱建物はSB、土坑はSCを使用した。
8. 自然科学分析については、(株)古環境研究所に依頼し、杉山氏による分析結果を掲載している。
9. 空中写真撮影については、(株)スカイ・サーベイの森氏による。
11. 本書における方位は磁北、レベルは海拔高である。
12. 出土品は、日南市教育委員会にて保管している。またその内の一部は、日南市都市農村交流センターにて展示を行っている。
13. 本書の執筆編集は、的場が行った。

本文目次

巻頭グラビア

- 巻頭グラビア (1) 大園遺跡A地区全景
- 巻頭グラビア (2) 大園遺跡C地区全景
- 巻頭グラビア (3) 大園遺跡B地区全景
- 巻頭グラビア (4) 大園遺跡B地区1号住居跡遺物出土状況

第I章 はじめに

- 第1節 調査に至る経過…………… 3

第II章 遺跡の概要

- 第1節 遺跡の位置と環境
 - 1. 地理的環境…………… 3
 - 2. 歴史的環境…………… 4
- 第2節 遺跡の概要
 - 1. 調査経過…………… 5
 - 2. 遺跡概要
 - (1) 基本層序…………… 9
 - (2) 調査区設定及び遺構…………… 9
 - (3) 遺物
 - ア. 土器…………… 9
 - イ. 石器…………… 9

第III章 調査

第1節 遺構

- 1. A地区の遺構…………… 12
 - (1) 1号土坑…………… 12
 - (2) 1号堀立柱建物…………… 12
 - (3) 2号堀立柱建物…………… 12
 - (4) 3号堀立柱建物…………… 12
- 2. B地区の遺構…………… 18
 - (1) 1号住居跡…………… 18
 - (2) 2号土坑…………… 18
 - (3) 3号土坑…………… 18
 - (4) 4号堀立柱建物…………… 21
 - (5) 5号堀立柱建物…………… 21
 - (6) 6号堀立柱建物…………… 21
 - (7) 7号堀立柱建物…………… 21
- 3. C地区の遺構…………… 31
 - (1) 近代墓跡…………… 31
 - (2) その他…………… 31
- 4. 堀立柱建物の分類について…………… 33

第2節 遺物

- 1. A地区の遺物…………… 39
 - (1) 1号土坑出土遺物…………… 39
 - (2) その他の遺物…………… 39
- 2. B地区の遺物…………… 39
 - (1) 2号土坑出土遺物…………… 39
 - (2) 3号土坑出土遺物…………… 39
 - (3) その他の出土遺物…………… 39
 - (4) 1号土坑出土遺物…………… 39
- 3. C地区の遺物…………… 41

第IV章 自然科学分析

- 第1節 炭化材の樹種同定結果について…………… 42
- 第2節 放射性炭素年代測定結果について…………… 44

第V章 まとめにかえて…………… 48

挿 図 目 次

第1図	大園遺跡位置図	1
第2図	大園遺跡周辺地形図	7～8
第3図	大園遺跡基本土層図	9
第4図	調査区設定及び遺構分布図	11～12
第5図	A地区遺構平面図	13
第6図	A地区遺物分布図	14
第7図	1号土坑遺物出土状況及び遺構実測図	15
第8図	1号堀立柱建物実測図	16
第9図	2号堀立柱建物実測図	17
第10図	3号堀立柱建物実測図	17
第11図	B地区遺構平面図	19
第12図	B地区遺物分布図	20
第13図	1号住居跡遺物出土状況実測図及び土層断面図	22
第14図	1号住居跡遺構実測図	23
第15図	2号土坑遺物出土状況及び遺構実測図	24
第16図	3号土坑遺物出土状況及び遺構実測図	25
第17図	4号堀立柱建物実測図	26
第18図	5号堀立柱建物実測図	27
第19図	6号堀立柱建物実測図	28
第20図	7号堀立柱建物実測図	28
第21図	C地区遺構平面図	29～30
第22図	近代墓跡土層断面及び遺構実測図	31
第23図	谷筋土層断面図	32
第24図	A地区出土遺物（その1：1号土坑他）	35
第25図	B地区出土遺物（その1：2号土坑、3号土坑及び1号住居跡他）	36
第26図	B地区出土遺物（その2：1号住居跡）	37
第27図	B地区出土遺物（その3：1号住居跡）	38

表及びグラフ目次

第1表	遺跡番号及び遺跡名対照表	2
第2表	堀立柱建物一覧表	34
第3表	弥生土器観察表（1）	45
第4表	弥生土器観察表（2）	46
第5表	弥生土器観察表（3）	47
グラフ1	堀立柱建物主軸別構成グラフ	33

図 版 目 次

図版1	大園遺跡全景	50
図版2	A地区、B地区、C地区調査前状況	51
図版3	A地区全景	52
図版4	1号土坑及びA地区遺物出土状況	53
図版5	1号堀立柱建物、2号堀立柱建物、3号堀立柱建物	54
図版6	B地区全景	55
図版7	1号住居跡遺物出土状況（その1）	56
図版8	1号住居跡遺物出土状況（その2）	57
図版9	1号住居跡土層断面及び遺構検出状況	58
図版10	2号土坑及び3号土坑遺物出土状況、遺構検出状況	59
図版11	4号堀立柱建物、5号堀立柱建物	60
図版12	6号堀立柱建物、7号堀立柱建物	61
図版13	C地区全景	62
図版14	近代墓跡土層断面及び遺構検出状況	63
図版15	谷筋土層断面検出状況	64
図版16	A地区出土遺物（その1：1号土坑他）	65
図版17	B地区出土遺物（その1：2号土坑、3号土坑及び1号住居跡他）	66
図版18	B地区出土遺物（その2：1号住居跡）	67
図版19	B地区出土遺物（その3：1号住居跡）	68
図版20	作業風景、遺跡現地説明会の様子	69

巻頭グラビア (1)



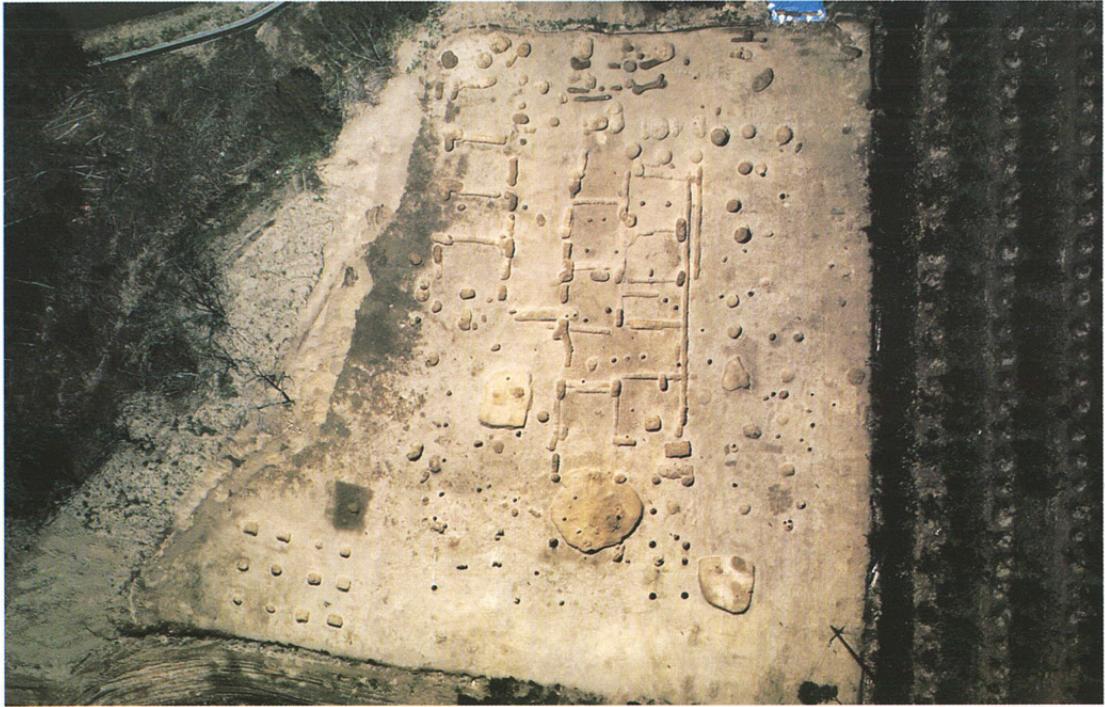
大園遺跡A地区全景

巻頭グラビア (2)



大園遺跡C地区全景

巻頭グラビア (3)



大園遺跡B地区全景

巻頭グラビア (4)



大園遺跡B地区1号住居跡遺物出土状況

大園遺跡位置図



第 1 図

遺跡番号及び遺跡名対照表

遺跡番号	名称	所在地	種別	時代	遺跡番号	名称	所在地	種別	時代
205	駒宮遺跡	日南市大字平山字別府	散布地	弥生～中世	416	野添遺跡	日南市大字戸高字野添	散布地	縄文～中世
206	高佐砦跡	日南市大字益安字堀之内	城跡	中世	417	和田迫遺跡	日南市大字戸高字和田迫	散布地	弥生～中世
207	前無田遺跡	日南市大字東弁分乙字前無	散布地	中世	418	横通遺跡	日南市大字戸高字横通	散布地	弥生～中世
208	鬼ヶ城跡	日南市大字字城ヶ平地	城跡	中世	419	懸城跡	日南市大字戸高字古城他	城跡	縄文～中世
209	沢渡遺跡	日南市大字松永字沢渡	散布地	中世	420	城之下遺跡	日南市大字戸高字城之下他	散布地	弥生～近世
210	陣ヶ迫遺跡	日南市大字松永字陣ヶ迫	散布地	中世	421	中浦ヶ迫遺跡	日南市大字戸高字中浦ヶ迫	散布地	弥生～中世
211	犬ヶ城跡	日南市大字松永字沢渡	城跡	中世	422	黒須田遺跡	日南市大字戸高字黒須田	散布地	縄文～中世
212	殿所遺跡	日南市大字殿所字上ノ段他	散布地	縄文～中世	423	上尾山遺跡	日南市大字戸高字上尾山	散布地	弥生～中世
213	岩ヶ尾遺跡	日南市大字殿所字岩ヶ尾	散布地	弥生～古墳	424	下尾山遺跡	日南市大字戸高字下尾山	散布地	縄文～近世
214	中ノ尾遺跡	日南市大字殿所字城ヶ平地	城跡	中世	425	大谷遺跡	日南市大字戸高字大谷	散布地	中世～近世
301	飛ヶ峯遺跡	日南市大字板敷字出水ヶ尾	散布地	古墳～中世	426	海田西遺跡	日南市大字戸高字海田西	散布地	弥生～近世
302	談義所遺跡	日南市大字今町字広木田	散布地	縄文～中世	428	岩山遺跡	日南市大字隈谷甲字岩山	散布地	近世
303	糺遺跡	日南市大字板敷字中島田	散布地	平安～中世	429	平峯遺跡	日南市大字隈谷甲字平峯	散布地	縄文～近世
304	菖蒲ヶ迫遺跡	日南市大字板敷字菖蒲ヶ迫	散布地	縄文～中世	430	上床遺跡	日南市大字隈谷甲字上床	散布地	縄文～近世
305	宮守ヶ迫遺跡	日南市大字板敷字宮守ヶ迫	散布地	縄文～中世	431	峰ノ原遺跡	日南市大字隈谷甲字峰ノ原	散布地	弥生～中世
306	北ヶ迫遺跡	日南市大字板敷字北ヶ迫	散布地	縄文～中世	432	六反田遺跡	日南市大字隈谷甲字六反田	散布地	縄文～中世
307	西山寺遺跡	日南市大字板敷字西山寺	散布地	縄文～中世	433	川北三遺跡	日南市大字隈谷乙字川北三	散布地	縄文～近世
308	上永吉遺跡	日南市大字吉野方字楠木原	散布地	中世	434	川北一遺跡	日南市大字隈谷乙字川北一	散布地	弥生～平安
309	片平遺跡	日南市大字吉野方字片平	散布地	縄文～中世	435	平原遺跡	日南市大字隈谷丙字平原	散布地	縄文～中世
310	飢肥城跡	日南市大字楠原字舞鶴跡	城跡	中世～近世	501	影平遺跡	日南市大字平野字影平他	散布地	縄文～中世
311	飢肥城下町	日南市大字楠原字板敷他	城下町	近世	502	否手平遺跡	日南市大字平野字否手原他	散布地	弥生～近世
312	篠ヶ城遺跡	日南市大字吉野方字篠ヶ城	散布地	縄文～中世	503	山田上遺跡	日南市大字平野字山田上他	散布地	縄文～中世
313	上ノ原遺跡	日南市大字吉野方字上ノ原	散布地	縄文～中世	504	沢津城跡	日南市大字平野字城ヶ平地	城跡	中世
314	川辺ヶ野遺跡	日南市大字吉野方字川辺ヶ野	散布地	縄文～中世	505	堀川運河	日南市材木町他	運河	近世
315	八幡原遺跡	日南市大字楠原字八幡原	散布地	中世	506	油津山上古墳	日南市油津一丁目	古墳	古墳
316	原坂ノ上遺跡	日南市大字楠原字原坂ノ上	散布地	縄文～中世	507	古奥遺跡	日南市大字平野字梅ヶ浜	散布地	平安
317	諏訪ノ馬場遺跡	日南市大字楠原字諏訪ノ馬場	散布地	縄文～中世	601	酒谷上床遺跡	日南市大字酒谷乙字上床	散布地	不詳
318	上城跡	日南市大字楠原字上城	城跡	中世	701	南郷城跡	日南市大字下方字東平他	城跡	中世
319	大原道遺跡	日南市大字楠原字大原道	散布地	中世	702	内野原古墳群	日南市大字下方字仮屋西他	古墳群	古墳
320	寺ノ尾遺跡	日南市大字板敷字寺ノ尾	散布地	弥生～中世	703	竹田遺跡	日南市大字上方字竹田	散布地	弥生～近世
321	長持寺廃寺跡	日南市大字板敷字前田	寺院跡	中世	704	大園遺跡	日南市大字上方字大園	散布地	縄文～近世
322	大迫寺廃寺跡	日南市大字吉野方字大迫寺	寺院跡	中世	705	石脇遺跡	日南市大字萩之嶺字石脇	散布地	弥生～中世
401	堰ノ尾砦跡	日南市大字星倉字栗殿城	城跡	中世	706	富山堂免遺跡	日南市大字萩之嶺富山堂免	散布地	縄文～近世
402	新山城跡	日南市大字星倉字本丸他	城跡	中世	707	馬込ヶ原遺跡	日南市大字萩之嶺馬込ヶ原	散布地	縄文～中世
403	釈迦門遺跡	日南市大字星倉字釈迦門	散布地	中世	708	宮ノ原遺跡	日南市大字萩之嶺宮ノ原	散布地	縄文～中世
404	釈迦尾ヶ野遺跡	日南市大字星倉字立久保	散布地	古墳～中世	709	東原遺跡	日南市大字萩之嶺字東原	散布地	縄文～近世
405	前田下遺跡	日南市大字星倉字前田下	散布地	縄文～中世	710	上村遺跡	日南市大字萩之嶺字上村	散布地	縄文～近世
406	立久保遺跡	日南市大字星倉字立久保	散布地	中世	711	数権遺跡	日南市大字萩之嶺字数権	散布地	縄文～中世
407	上講遺跡	日南市大字星倉字上講	散布地	縄文～中世	712	西ノ原遺跡	日南市大字萩之嶺字西ノ原	散布地	弥生～近世
408	射場遺跡	日南市大字星倉字南原	散布地	中世	713	東遺跡	日南市大字塚田乙字東	散布地	弥生～近世
409	時任遺跡	日南市大字星倉字石ヶ嶺	散布地	中世	101	高寺城跡	北郷町大字大藤字内の田	城館跡	中世
410	下講古墳	日南市大字星倉字石ヶ嶺	古墳	古墳	102	田中遺跡	北郷町大字大藤字田中	城館跡	縄文・弥生
411	川向遺跡	日南市大字星倉字上汐浦	散布地	中世	103	堀之内遺跡	北郷町大字大藤字堀之内	城館跡	縄文
412	下山瀬遺跡	日南市大字星倉字下山瀬	散布地	弥生～中世	104	宮園遺跡	北郷町大字大藤字宮園	城館跡	縄文
413	境ヶ谷北遺跡	日南市大字戸高字境ヶ谷	散布地	中世	105	尾崎遺跡	北郷町大字大藤字尾崎	城館跡	縄文
414	境ヶ谷遺跡	日南市大字戸高字境ヶ谷	散布地	弥生～近世	106	山澄遺跡	北郷町大字大藤字山澄	城館跡	不詳
415	境ヶ谷南遺跡	日南市大字戸高字境ヶ谷	散布地	中世～近世					

第 1 表

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経過

日南市内には、公立公民館及び公立の公民館相当施設等が主要な地域に配置されており、地区住民の生涯学習の場所として利用されたり、行事や催事の時にはその中心的な場所として利用されたりして、コミュニケーションを交わす重要な場所としてその役割を果たしている。日南市の南東に位置する下方、上方から萩之峰、塚田までを含めた細田地区には、このような公立公民館相当施設が無い状態で現在に至っており、施設の設置が住民の悲願となっていた。こういった状況の中、平成7年度になり、農村資源活用農業構造改善事業の一環として都市と農村の住民交流を図ることをコンセプトとした交流センター建設の実施を迎えることとなった。

当初、交流センターの建設場所については、埋蔵文化財と工事の関係から遺跡の包蔵地を外して検討されたが、地区住民の熱心な要望で今回調査を実施することとなった丘陵地が最も最適な場所であるという結論に達した。その後農政課との協議をすすめ、調査と工事の双方にできるだけ支障をきたさない形でそれぞれの事業を実施することで協議の一致をみた。

これを受けて、まず、遺跡の規模と性格を把握するため試掘調査を実施した。試掘調査は、平成7年11月から12月にかけて実施した。試掘の対象となった面積は、約13,000㎡となったので、対象地内において試掘可能な場所には、できるだけ多くのトレンチを設定するようにした。最終的には、14ヶ所のトレンチを設定し、その全てのトレンチから遺物が検出された。また、トレンチNO.2からは、柱穴の跡も検出された。

試掘調査の結果より、工事対象地全面の調査が必要となったため農政課と再度協議した結果、開発、調査双方の事業を尊重した上で、対象地を3分割し、調査が終了した地区より順次引き渡し、工事に支障をきたさない形で遺跡の記録保存を目的とした調査を実施することとなった。

第Ⅱ章 遺跡の概要

第1節 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

日南市の地形は、山地・平野・海岸から構成されている。市域の大部分を占める山地は、丘陵性山形をなし、市のほぼ中央を流れる広渡川を境として西半分と東半分に分けられる。西半分は、南那珂山地の一部を除いては、なだらかな丘陵地形を形成しているのに対して、東半分は、比較的急峻な一つの独立した山地を形成しており鶴戸山塊と呼ばれている。この地形の違いは、東半分が浸食に比較的強い宮崎層群からなっているのに対し、西半分が浸食に対する抵抗力の比較的弱い日南層群から形成されていることに起因しているものと思われる。しかし、日南層群が形成される地域でも、北西部や西部の奥地ともなると砂岩に富む比較的堅固な地層からなっているため急峻な地形を残しており、標高千メートルに近い小松山や男鈴山等の本地域の最高峰群を形成する山脈を有している。

日南層群は、そのほとんどが純海成層で、岩層的には砂岩層、砂岩頁岩互層、頁岩層からなり頁岩層がその大部分を占めている。日南層群下層部では、150～200メートルの厚さで頁岩を主としており、中層部は、流紋岩質凝灰岩をはさむ砂岩にはじまり厚い頁岩に終わる一堆积輪廻を示し、300～500メートルの厚さに達する。上層部も砂岩にはじまり頁岩に終わる一堆积輪廻を示すが、層厚は南東部で200メートルを測り、北西部に向かい減じて100メートル以下となる。「大園遺跡」を含む男鈴山周辺の日南層群は、少なくとも1,600～1,800メートルの厚さを持ち、海成ないし汽水成で、時に淡水成をはさむこともある。

日南層群は、これまでの産出化石から新生代古代三紀に比定され、絶対年代で3300万年前～1500万年前と考えられる。また、最近、酒谷川上流や殿所等から、ネレイテスと呼ばれる生痕化石（TRACE FOSSILS）の一種だと推定されるものが発見されている。これは、環虫類（ごかいのようなもの）がはった跡の化石のことで、環虫類そのものの化石を指すものではなく、そのはった跡（生存していた状況を示す跡）そのものを示す化石をさしてこう呼称する。こういった化石は、高知県の四万十川層群や室戸層群にも多く含まれ、高知県佐川町の「佐川地質館」には、日南で発見されたものと全く同じネレイテスの化石が展示してあり、日南層群との密接な関係を示す顕著な資料といえる。

日南市と南郷町の境近くを流れる細田川は、下方で南郷川と合流し、大堂津の町を東側にして南下して流れ、目井津港をぬけて日向灘へと注ぐ。「大園遺跡」は、この細田川の沿岸に広がる沖積平野を見下ろす海拔約300メートルの滝ヶ平山の北側に位置する海拔約15～16メートルを中心とする丘陵部の一部分である。細田川を挟んだ対岸は、男鈴山から連なる丘陵性山系の東側一端を形成する丘陵地が続く。

目井津港から「大園遺跡」までは、直線距離で約4kmを測り、細田川下流の下方から上流部に沿う河岸段丘上には、その両岸に水田が広がっている。遺跡が広がる丘陵地の直下にも水田が広がり、平野の少ない本市においては、河岸段丘上の水田の縁辺部と丘陵性山形の縁辺部が接することが多いようである。

2. 歴史的環境

日南市内の遺跡分布調査によれば現在までに確認されている遺跡の大半は、山間部をぬって流れる広渡川、酒谷川、細田川などの河川沿いに形成された狭い平野部に隣接する形で存在する丘陵部に多く分布するようである。また、国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されている飫肥地区は、その城下町全域を遺跡（311）として周知している。鶴戸地区やリゾート施設の並ぶ宮浦地区などの日南海岸沿いにも、丘陵上や微高地において縄文時代などの遺跡の分布が確認される。以下、時代毎に分けて述べてみたい。

旧石器時代については、これまで遺跡は確認されていない。

縄文時代については、市域において約60ヶ所の遺跡が確認されている。特徴としては、早期と後期の遺跡が多いことである。早期の遺跡としては、これまで5遺跡について、調査済であるが、なかでも早期の竪穴式住居跡12軒と集石遺構19基が検出された坂ノ上遺跡（717）は、県内でも最大級の集落遺跡である。現在整理作業中であるが、平成8年度に実施した「川辺ヶ野遺跡」では、縄文時代早期（約9500年前）の集石遺構が約7基検出された。また早期の貝殻文系の土器片も同時に出土している。一方、後期の遺跡としては市来式土器を中心にした後期縄文土器を多量に出土した上講遺跡（407）がある。上講遺跡では、このほか土製円盤や磨石なども出土している。

これらの遺跡の他、殿所遺跡（212）や川北三遺跡（433）などがある。

弥生時代については、これまで16ヶ所の遺跡が確認されている。これまで弥生時代の遺跡の調査は、飫肥城下町遺跡や上講遺跡などで、土器などは、出土していたものの住居跡や集落遺跡は、確認されていなかった。弥生時代の遺跡は、日南市域においては、段丘上や山裾の丘陵地などに限られており、低地での遺跡は、平成7年度に九州電力(株)日南営業所の新社屋建設に伴う試掘調査で、非常に状態の悪い土器片を数点採取できた所をのぞいては確認されていない。

弥生時代の遺構を伴う遺跡としては、平成7年度に実施した影平遺跡において、弥生時代中期の集落遺跡が検出された。同遺跡では、住居跡4軒や土坑8基を検出でき、遺物も中期の山之口式土器等の遺物を中心に瀬戸内系の鋸歯紋を有する土器や波状紋土器、円形浮紋を有する土器、石皿、磨り石、磨製石鏃など多種多様に出土している。そして、今回調査を実施した「大園遺跡」においてそれに続く弥生時代終末期の住居跡を検出できており、日南市内における弥生時代の研究も点から線へ展開されることとなるであろう。

古墳時代に入ると市内には、県指定の細田古墳（702）と東郷古墳（008）の2基を含めた5基の古墳が存在する。油津港を見下ろす丘陵上に築かれた油津山上古墳は、日南市内では、最古の古墳と考えられていたが、現在は、存在しない。古墳時代終末期の古墳としては、風田の海岸に近い砂丘上に立地し、現在は、国立療養所日南病院の敷地内に存在する狐塚古墳（203）がある。同古墳は、平成6年度に環境整備のための調査を行った結果、横穴式石室を主体とする古墳で石室の規模は、県内最大規模であることが判明した。また、出土した遺物も多種多様で水晶製勾玉や水晶製切子玉、馬具、装飾刀剣、耳環、青銅製椀、青銅製鈴、須恵器坏、須恵器蓋坏、ハソウ、須恵器高坏、鉄鏃、管玉と畿内色を帯びたものが多い。

一方、日南市域では、地下式横穴墓は、これまで確認されていない。また、同時代の集落遺跡も確認されていない。

奈良時代から平安時代までの遺跡は、あまり確認されていない。飫肥城下町遺跡（311）の調査で、平安時代の集落が確認されている。また、狐塚古墳（203）では、石室内部を転用した形での平安時代の製塩遺構の跡が確認できる。同古墳の内部からは、布目圧痕土器片が約3,000点ほど出土している。

このほか、布目圧痕土器は、約16ヶ所の遺跡から採集されている。

鎌倉時代以降は、山城を中心とした中世城館の遺跡が中心となってくる。現在約13ヶ所の山城及び城館が確認されている。飫肥城跡（310）、酒谷城跡（611）、新山城跡（402）などが代表的なものとして上げられる。

近世に入ってから、国の重要伝統的建造物群保存地区にも指定されている飫肥城下町遺跡（311）がある。飫肥城は、中世より薩摩藩島津氏と伊東氏が再三合戦を行い城主が入れ替わってきたが、伊東祐兵の入城以来は、400年間にわたり伊東氏により統治されてきた。飫肥地区には、長持寺廃寺跡（321）や大迫寺廃寺（322）などの寺院跡や大龍寺跡墓碑群、歓楽寺の墓碑群などがある。

《参考文献》

- (1) 『日南市埋蔵文化財調査報告書 第1集 日南市遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ』日南市教育委員会1990年3月
- (2) 『日南市埋蔵文化財調査報告書 第2集 日南市遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ』日南市教育委員会1993年3月
- (3) 『日南市埋蔵文化財調査報告書 第3集 飫肥城跡』日南市教育委員会 1994年3月
- (4) 『日南市埋蔵文化財調査報告書 第4集 日南市内遺跡発掘調査概報』日南市教育委員会 1995年3月
- (5) 『日南市埋蔵文化財調査報告書 第5集 上講遺跡』日南市教育委員会 1995年3月
- (6) 『日南市埋蔵文化財調査報告書 第6集 日南市内遺跡発掘調査概報』日南市教育委員会 1997年3月
- (7) 『日南市埋蔵文化財調査報告書 第7集 影平遺跡』日南市教育委員会 1997年3月
- (8) 『日南市史』昭和53年1月30日 日南市
- (9) 『日本化石集 第23集 生痕化石』
- (10) 『日本化石図譜』

第2節 遺跡の概要

1. 調査経過

大園遺跡は、日南市大字上方字大園1032番地3他に位置している遺跡である。

調査は、農村資源活用農業構造改善事業日南市都市農村交流センター建設により、破壊される「大園遺跡」のはほぼ全域にわたり実施された。期間は、平成8年1月末から平成8年7月の初旬にかけて約6ヶ月を要した。調査対象面積は、約13,000㎡となったが、地形上の特性と平成7年度に実施した試掘データ及び

工事との工程表との関係から、対象地を3地区に分割して調査を実施することとした。ほぼ真北に位置する水田地帯から遺跡の存在する丘陵地を望んで左側の一段低くなっている平地をB地区とし、その上段に広がる比較的緩やかな平地をA地区とした。そして、A、B地区に接する形で右側に広がる平地と傾斜地からなる部分をC地区とした。調査は、工事の工程と調査により産出される廃土の置き場等の関係からB地区、A地区、C地区の順番で進めていった。

A地区は、面積約3,200㎡を測り調査前の状況では畑として利用されており、海拔16メートル～20メートルの比高差約4メートルの緩やかな傾斜地に野菜が中心に栽培されていた。試掘データを基にすると耕作土が約30センチから40センチの厚さで堆積しているが、その直下が遺物包含層となり耕作の際に包含層の殆どを破壊しているように考えられる。包含層は、約10センチから残りの良い部分で15センチほどしか残っていなかった。また、包含層の精査と同時に遺構の検出に努めた。耕作土を重機で剥いだ後、包含層(第Ⅲ層:基本土層図 第3図を参照)上部から人力による掘削作業を開始した。第Ⅲ層を掘り下げていく段階で出土した遺物は、分布図を作成した。第Ⅲ層中では、遺構等の検出は、難しく第Ⅳ層上部で小礫を含む硬い粘質土に堀込む形で土坑1基と堀立柱建物3棟等を検出できた。また、遺構や遺物の確認された第Ⅲ層及び第Ⅳ層の直下は、岩盤層となり遺物、遺構は認められないことも確認した。

B地区の調査は、面積約3,500㎡を測り、A地区の調査に先行して行った。B地区は、A地区との境界に約2メートルの比高差をもつ段差があり、かつB地区側の境界には、排水用の溝も存在した。A地区は緩やかな傾斜地を形成していたが、B地区は、海拔13メートルを中心とした平らかに整地された地形で、柑橘類の育苗地として利用されていた。B地区の元々の地形は、傾斜地であったようで畑地として利用するために掘削を行い平地としたことと、耕作土としてA地区から土砂を搬入したことが、地権者の方からの情報として確認されている。試掘のデータを基にするとB地区においては、A地区より耕作土が更に薄く約20cmを測り、その下層から基本土層図の第Ⅲ層にあたる遺物の包含層が存在する。前述したようにB地区には、A地区よりの土砂が搬入されていた関係から遺物を包含していた層の上部では、A地区からの土砂に混じる形で磨耗の進んだ非常に状態の悪い土器片が多数出土した。しかし、この遺物を含む層は、基本土層図の第Ⅲ層の遺物包含層より、上位に位置する層であり、元来の遺物包含層とは異なる。調査では、この包含層を含めた遺物包含層を人力により掘削していき、それと同時に遺構の検出にも努めた。この段階でははっきりとした遺構の確認は難しかった。最終的にはA地区と同様第Ⅳ層に堀込む形で検出となった。B地区においては、弥生時代終末期の竪穴式住居跡が1軒と堀立柱建物が4棟、弥生時代の土器を伴う土坑が2基検出された。

C地区は、面積約6,000㎡を測りその南側の約半分が柑橘類や柿等による果樹園として利用されており、残りの北側約半分は、湿気の多い傾斜地で杉林と雑木林となっていた。C地区は、A、B地区が比較的平坦であったのに対して、比較的傾斜を持つ地形となっており、C地区の中央部分をこの地区の面積の約半分近くを占める割合で谷筋が縦断していた。C地区全体として、その地形をみると東西両肩から中央の谷筋に向かって緩やかに傾斜しており、遺物や遺構はほとんど確認されなかった。なお、本来であれば谷筋全体を掘削するべきところではあろうが、センター建設における基礎への懸念と工期的な点から実施しなかった。これは、谷筋への2ヶ所のトレンチの土層断面とそこから遺物等が検出されなかったことなどを総合的に判断して、人工的な堀込みではなく、自然地形による落ち込みであることが確認されたことによる。C地区において遺構として取り上げるものとしては、時代的に昭和の初期頃と見られる土葬の跡と見られる長方形の堀込みがあげられる。その他C地区には、比較的年数の経った杉が植えられていたため土坑と取り違えそうな樹根の跡が、多数見受けられた。

大園遺跡周辺地形図



第 2 図

2. 遺跡の概要

(1) 基本層序

大園遺跡は、地質学的には日南市の西部に広がる日南層群の上部に形成され滝ヶ平山系の北部に形成される丘陵地の一つに広がる遺跡である。調査区は、3分割され、A地区及びB地区においては、耕作土の直下に遺物包含層が存在し、その直下の層位で遺構を確認することができた。C地区については、顕著な遺構や遺物は、確認されなかった。ただ遺構として捉えるならば昭和初期のものと推察される近代墓の跡が挙げられる。遺物についてもA地区、B地区に比べると皆無に等しい。

I層：耕作土 10YR 4/3 にぶい黄褐色

II層：粒子の粗い粘質土 炭化物を含む 10YR 4/2 灰黄褐色

III層：遺物包含層 II層より粒子の細かな粘質土 10YR 5/6 黄褐色

IV層：小礫を含む岩石層 10YR 5/3 にぶい黄褐色

(2) 調査区設定及び遺構

調査地は、その地形の特徴と交流センター建設に係る工期的な面から3地区に分割し調査を実施した。ほぼ真北にあたる水田地帯から丘陵地を望んで、東側の滝ヶ平山に近い約3,200㎡をA地区とし、A地区の北側で約2メートル程下がった約3,500㎡を有する平地をB地区とした。A地区とB地区に接する形で、調査の対象となる丘陵地の東側約半分を占める地域をC地区とした。その対象となる面積は、約6,000㎡を測る。調査地の眼下には、水田が広がり細田川を挟んで男鈴山から続く丘陵性山形を望むことができる。A地区では、堀立柱建物が3棟と弥生時代の土坑が1基検出された。B地区では、弥生時代後期の竪穴式住居跡1軒と堀立柱建物3棟、弥生時代の土坑が2基検出された。C地区においては、昭和初期のものと推察される土葬の跡が検出された。

(3) 遺物

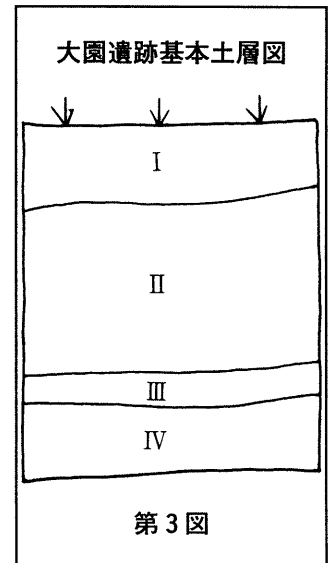
ア) 土器

出土遺物については、弥生土器を中心として古墳時代までの遺物が多量に出土した。A地区においては、弥生時代のものと思われる土坑に伴う土器以外は、主に樹根等による攪乱層からの出土がその大半を占めるため、時期の特定は難しいが古墳時代に比定される小型丸底壺やミニチュア土器などが発見されている。A地区は、B地区を畑として整備する際に多量の土砂を搬出した経緯があり、A地区南側の境界から推察すると1メートル以上削平された可能性がある。従ってA地区に元来原位置として出土されるべき遺物は、B地区へ搬入された土砂の中に多量に含まれているものと考えられる。A地区においては、4棟の堀立柱建物が検出されたが、柱穴内より堀立柱建物の時代を決定できる遺物は、検出されなかった。B地区では、弥生時代の竪穴式住居跡が検出され、住居址内からは、円形透かしを有する脚台、轆（羽口）、ミニチュア土器が検出された。この他、B地区では、弥生式土器を伴う土坑が2基検出されたが、双方から出土した土器は復元できなかった。また、B地区においても堀立柱建物が4棟検出されたが、時代を示共伴する遺物は、検出されなかった。

C地区において遺構に伴う遺物は、検出できずC地区全体でも出土した遺物は、ごく僅かである。

イ) 石器

石器では、1号住居跡から出土した石皿やA地区とB地区からそれぞれ1点ずつ打製石斧が検出されている。この他、試掘時にトレンチNO. 8から縄文時代のものと思われる磨製石斧片が検出されている。



第Ⅲ章 調査

第1節 遺構

1. A地区の遺構

A地区では、重機によりその南側から薄いところでは10センチたらずの耕作土を剥いだ跡に、基本土層図第Ⅲ層の遺物包含層の上部に達した時点で人力により、掘り下げていく作業を進めていった。A地区は、B地区より後に調査を開始した地区であったが、B地区に比べ遺物包含層も非常に薄く遺物の残存状況も極めて悪かった。包含層を掘り下げていく内、地区の海拔18メートル～19メートルを中心とした東側部分に黒色土の遺物包含層が検出された。当初は、いくつかの土坑が集合しているものとして、いくつかのプランを想定して土層断面を設定して、調査を進めていった。結果、これらの土坑の一群と思われたものは、樹根による攪乱されたプランで、出土した遺物もそれに伴うものであることが判明した。この調査を進めていく段階で、小型丸底壺や坏杯等が検出されたほぼ同レベルで、壺の口縁部を伴う長方形のプランを持つ土坑が検出された。この土坑は、上部が樹根等により、攪乱を受けていたため、堀込みは浅いものであった。土坑の上部で検出された土器は、口縁部分の一部で全体を想定復元できるその他の破片は、検出できなかった。A地区では、この弥生時代の土坑1基の他に堀立柱建物を3棟検出できた。

(1) 1号土坑

1号土坑は、南北に延びる楕円形を呈し、南北方向へ1メートル10センチを測り、東西方向へ85センチを測る。楕円形のプランN南側に一段低いほぼ円形の堀込みを有する。一段低くなる最深部では、45センチを測り、楕円形のプランの堀込みとしては、約20センチを測る。埋土の堆積状況は、5層からなり、第Ⅰ層は、10YR 5/6の黄褐色で、粘質のある土である。第Ⅱ層は、10YR 4/2の灰黄褐色でやはり粘質土である。第Ⅲ層は、10YR 4/3のにぶい黄褐色土で第Ⅰ層と似た粘質土である。第Ⅳ層は、10YR 5/3のにぶい黄褐色土で第Ⅲ層よりは、やや強い粘質土である。第Ⅴ層は、10YR 5/6の黄褐色土で5層中では一番強い粘質土である。また、第Ⅰ層の上部では、炭化物が検出された。

(2) 1号堀立柱建物

1号堀立柱建物は、東西方向を棟軸とする2間*3間の12穴からなる総柱建物である。主軸は、N-84°-Wにとり、桁行間6.2m、梁間4.2mを測る。柱穴は、ほぼ円形に近く素掘りで、直径が約40センチ前後のものが2穴とそれ以外は、60センチ前後で比較的統一性がとれている。柱穴の深さとしては、上部がかなり削平されていたので、残存状況の良い柱穴で、約30センチ程のものが1穴ある以外は、15センチ～20センチ程度の浅いものが多数を占める。

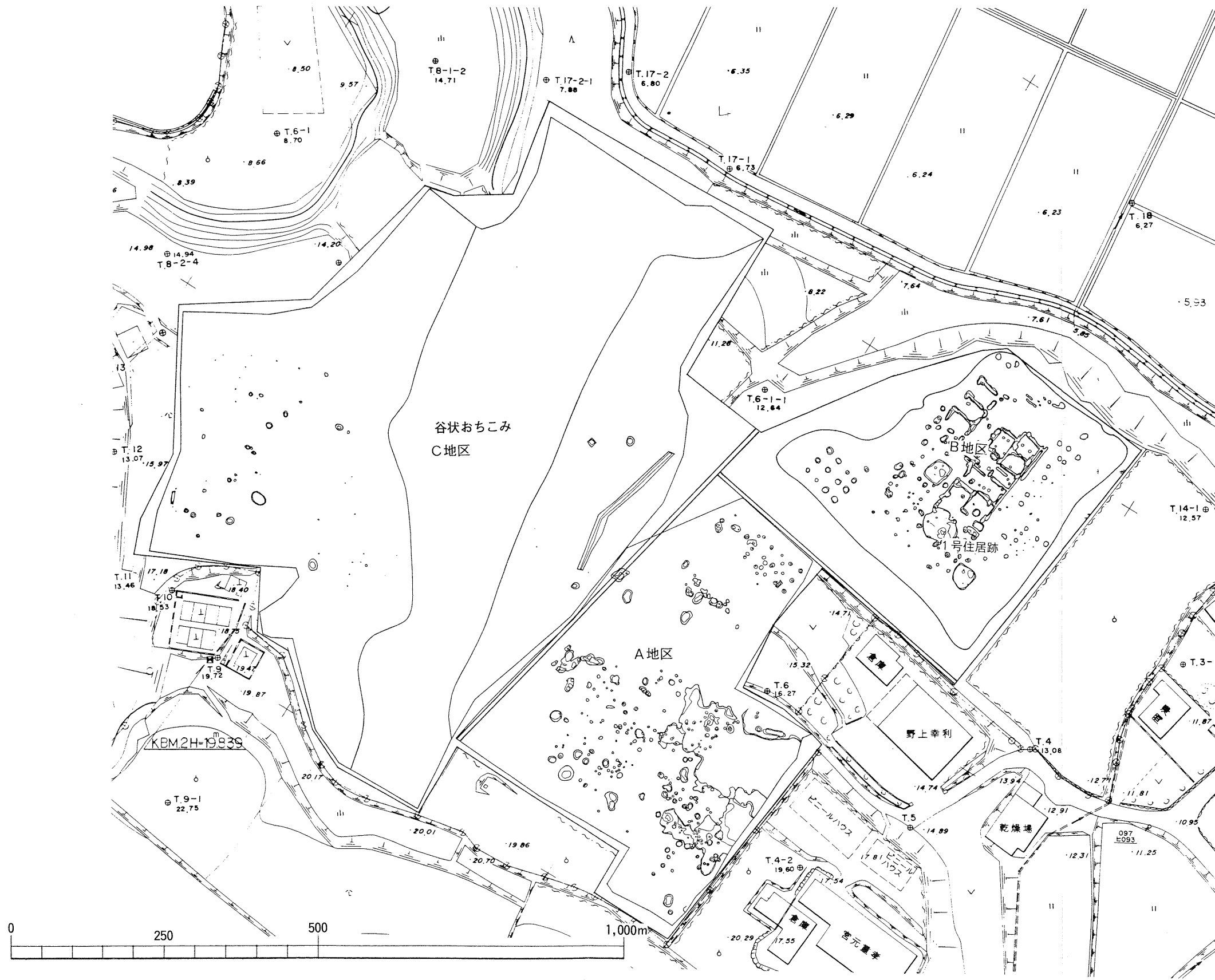
(3) 2号堀立柱建物

2号堀立柱建物は、南北方向を棟軸とする1間*3間大きさのもので、N-12°-Eに主軸をとる。桁行間10.3m、梁間3.8mを測る。柱穴は、8穴ともほぼ円形の素掘りで直径は、40～50センチ前後に集中する。深さについては、北東隅の柱穴が一番深く約30センチを測る他は、概ね15～20センチを測る。

(4) 3号堀立柱建物

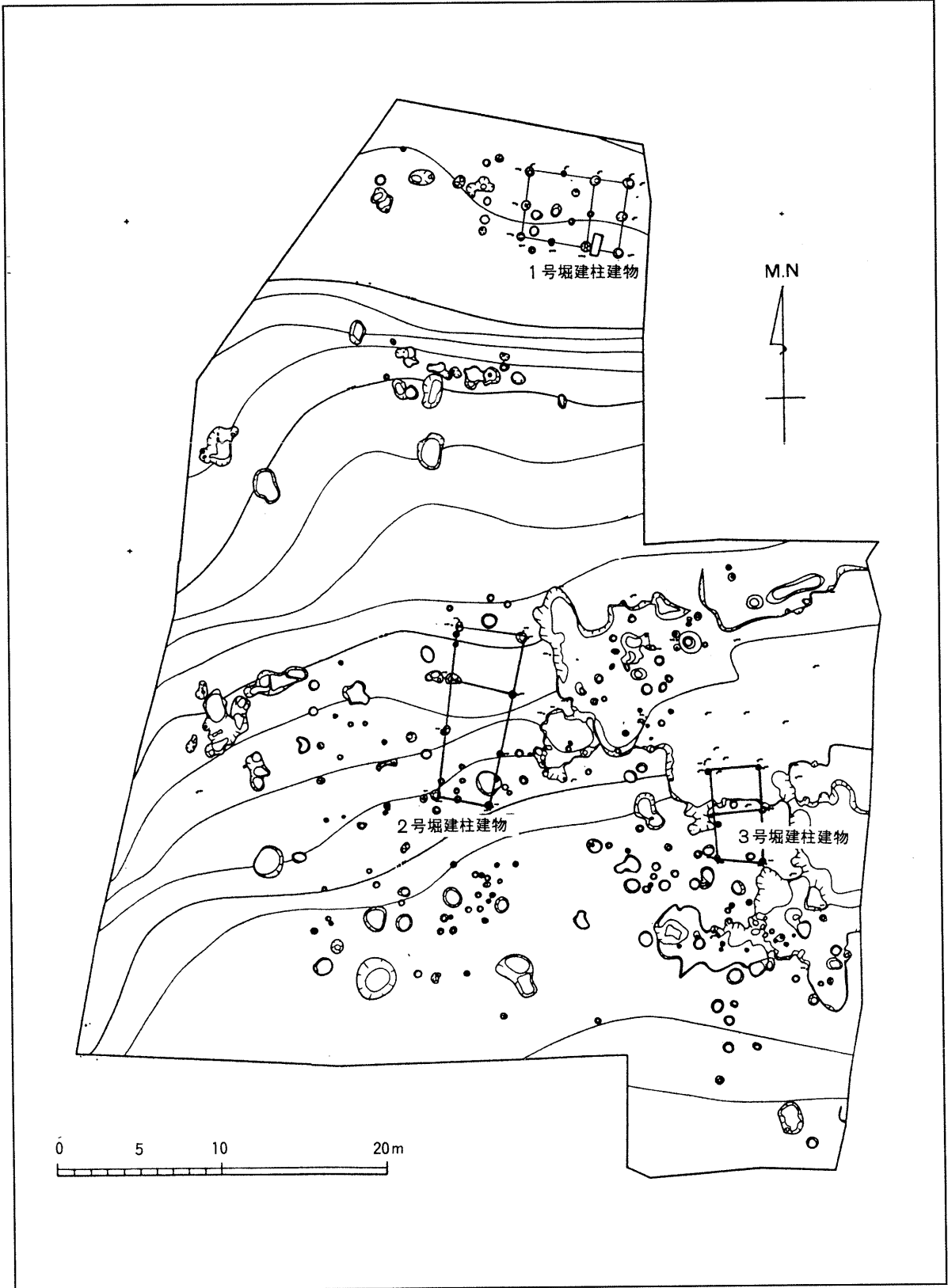
3号堀立柱建物は、2号堀立柱建物と同様南北方向を棟軸とする1間*2間の大きさで、N-3°-Wのほぼ真北に主軸をとる。桁行間5.2m、梁間3.0mを測る。柱穴の直径は、A地区の建物の中では小掘りで約30センチ前後である。深さは、おおむね25センチ前後で同程度の深さの柱穴が並ぶ。A地区の堀立柱建物の中では、比較的残存状況の良い深さの柱穴が並んでいる。しかし、検出状況としては、樹根による攪乱層の広がるエリアから検出された堀立柱建物なので、他の2棟よりは、むしろ検出状況は悪いともいえる。

調査区設定及び遺構分布図



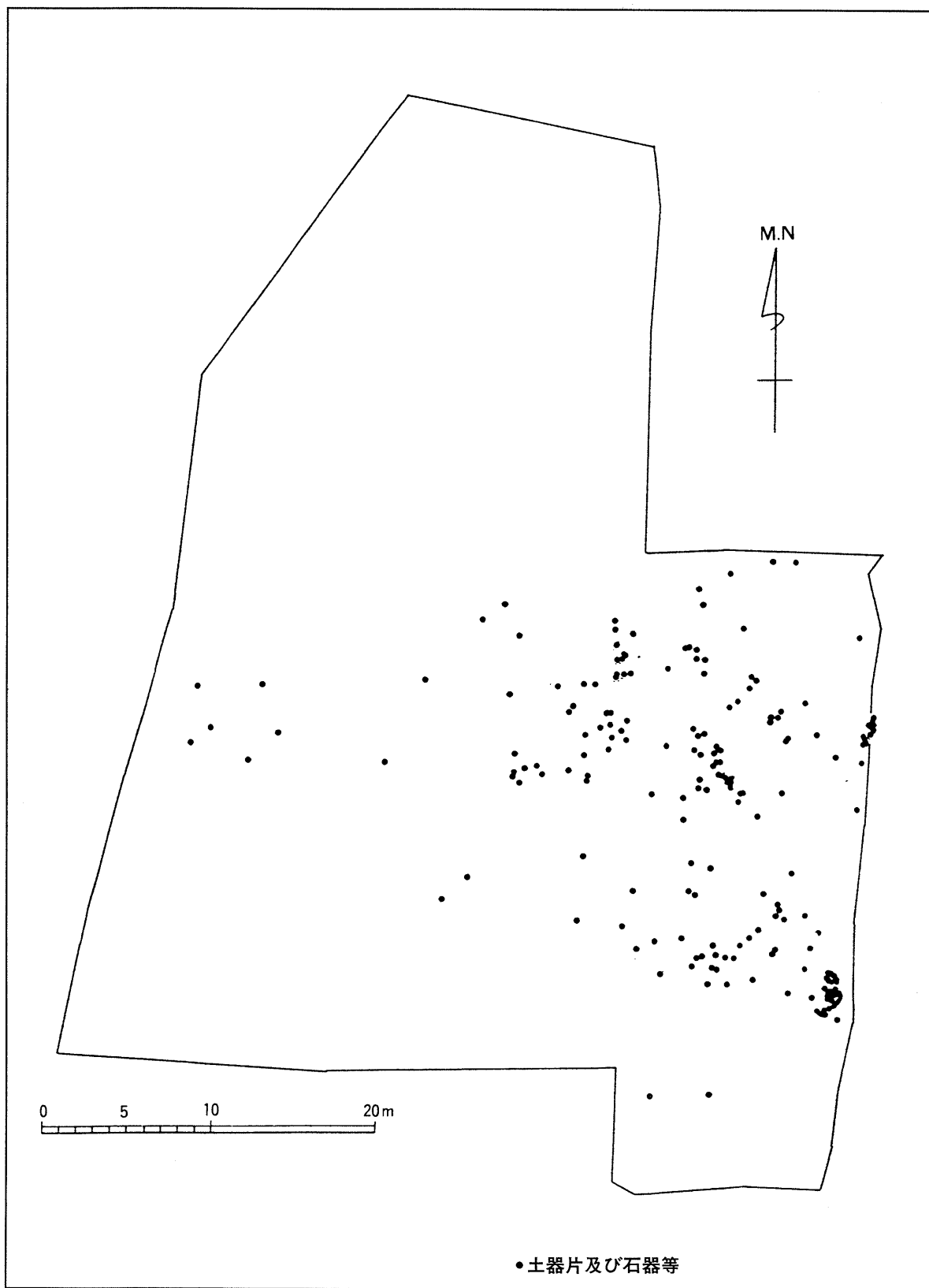
第 4 図

A地区遺構平面図



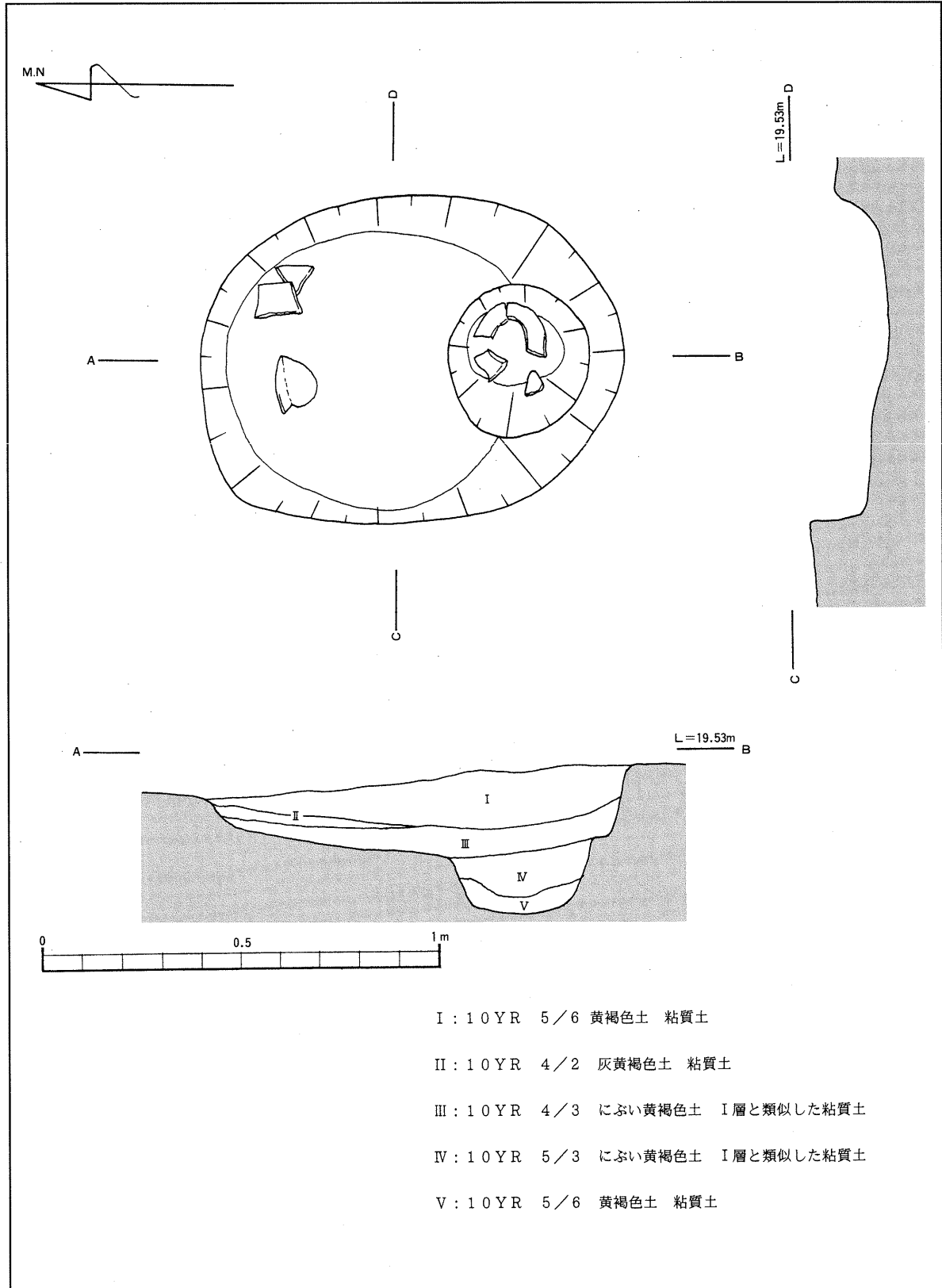
第 5 図

A地区遺物分布図



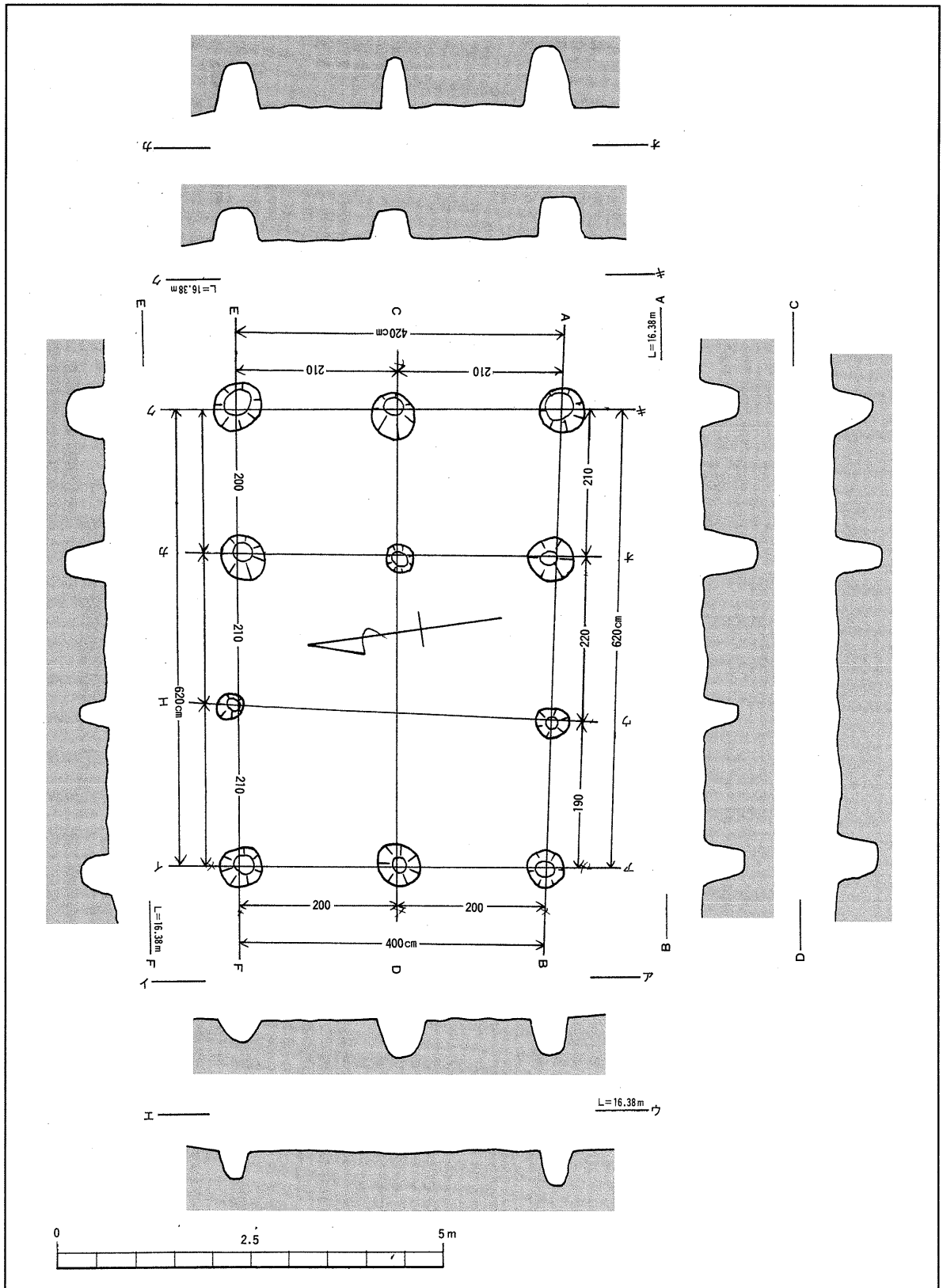
第 6 図

1号土坑遺物出土状況及び遺構実測図



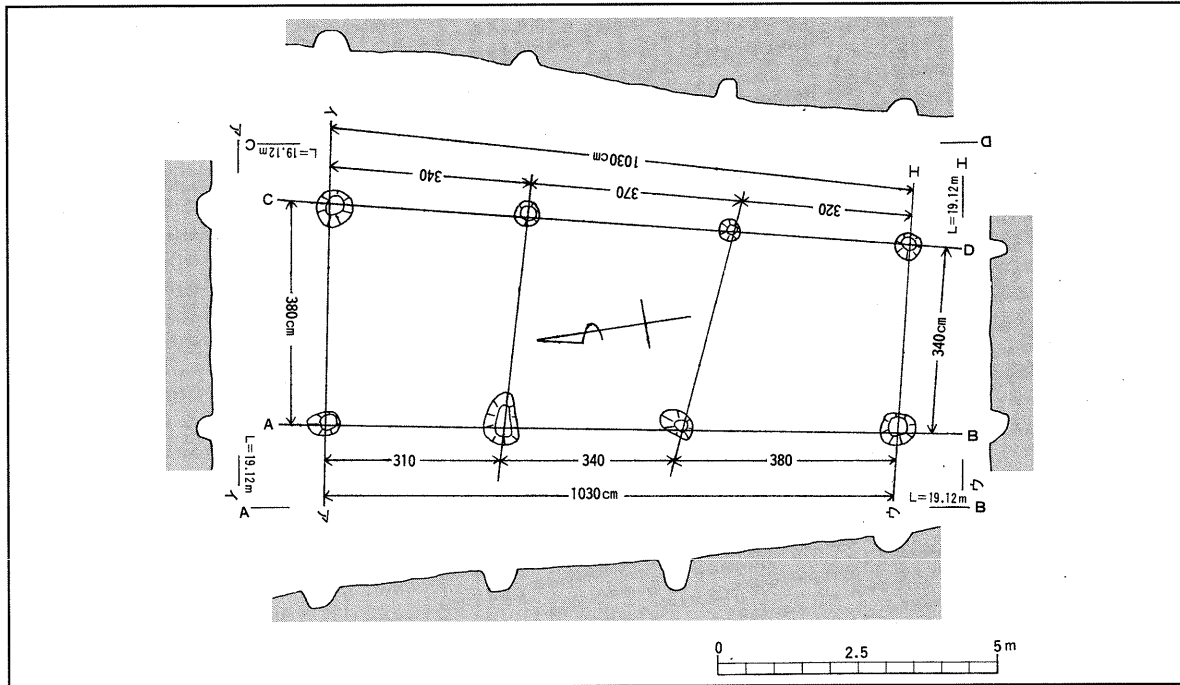
第 7 図

1号掘立柱建物实测图



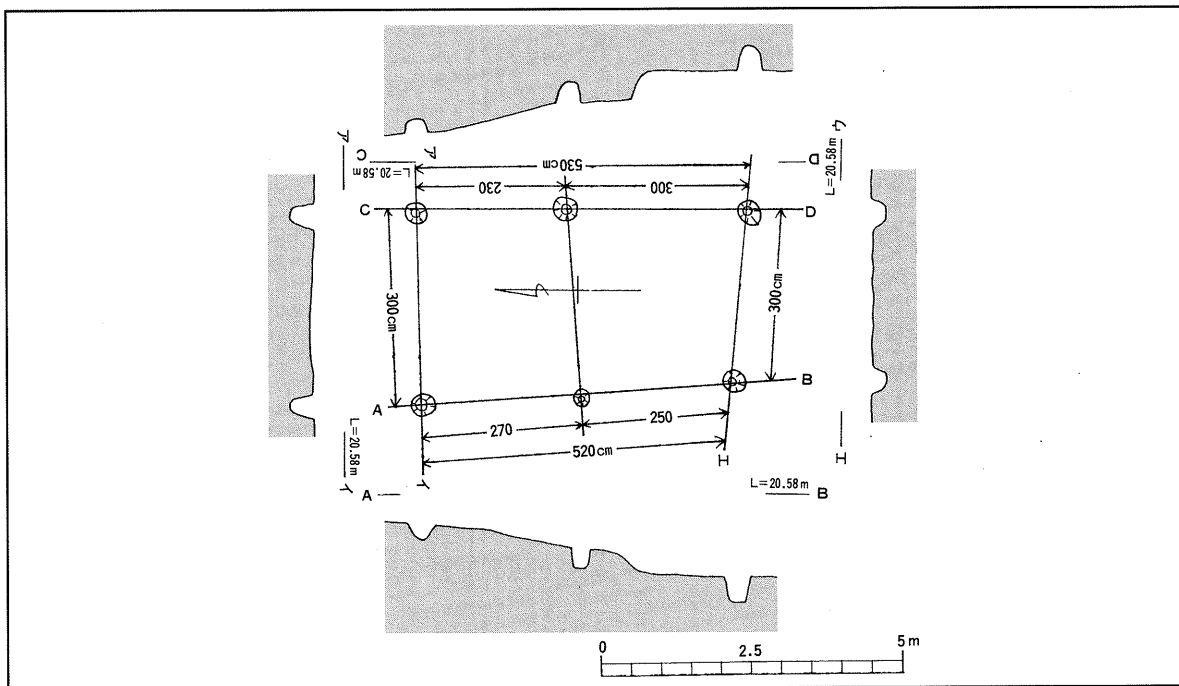
第 8 图

2号掘立柱建物实测图



第 9 图

3号掘立柱建物实测图



第 10 图

2. B地区の遺構

B地区の調査では、住居跡が1軒と土坑が2基、堀立柱建物が4棟検出された。B地区においては、耕作土が薄かったせいで、遺構検出面に耕作痕の後や作物の貯蔵穴等が、複雑に入り込んでいた。住居跡については、基本土層図第Ⅲ層直下にて検出され、第Ⅳ層に堀込む形でプランを確認した。また、他の土坑、堀立柱建物についても同様な形で検出することができた。以下、各遺構について詳細に述べることとする。

(1) 1号住居跡

1号住居跡は、標高13メートルの比較的平坦な地形に検出された住居跡である。基本土層図第Ⅲ層から遺物の包含層がB地区においても広がっていた。この包含層は、A地区からの搬入された土砂に混じる遺物と耕作等による攪乱をかなり受けていた。この層を掘り下げていく段階で、当初は、住居跡の上部で土坑らしきプランが検出された。結果的には、住居跡に土坑のプランが切り込む形で検出されたのだが、この土坑は、B地区が耕作地として利用されていた時に耕作土に混じる不要な散石やがれきなどを捨てて、燃やしていた後であることが判明した。その後、土坑のプランが検出できたレベルから掘り下げ、住居跡のプランの検出と遺物の検出に努めた。住居跡床面直上の遺物以外は、攪乱層に混じる磨耗や損傷の激しい遺物が大半をしめた。住居跡のプランは、最終的にはその上部がかなり攪乱と削平を受けていたため、非常に浅い状態での検出にとどまった。また北側のプランについては、農作物保存用の貯蔵穴や耕作痕等の影響を受け攪乱されており、確認することができなかった。住居跡は、東西に長軸をとる楕円形を呈し、東西方向へ5.8m、南北方向へ4.2mを測る。住居に伴う柱穴は、東西方向に2穴検出され、双方とも直径約40センチ程の楕円形の素堀りを呈する。また深さについてもそれぞれ20センチ前後と比較的浅いものであった。

住居跡の埋土状況は、所々攪乱などを受けている箇所もあったが、5層から構成された。第Ⅰ層は、10YR 5/3のぶい黄褐色土の粘質土。第Ⅱ層は、10YR 6/4のぶい黄橙色で第Ⅰ層と類似した粘質土で10YR 7/6 明黄褐色の1～2センチ程度のブロックを含む。第Ⅲ層は、10YR 4/1の褐灰色で、第Ⅰ層よりやや弱い粘質土。第Ⅳ層は、10YR 7/6の明黄褐色で、第Ⅴ層よりは、弱い粘質土。第Ⅴ層は、10YR 3/1の明黄褐色で、5層中では一番強い粘質土である。また、10YR 7/6 明黄褐色の1センチ大のブロックを大量に含んでいた。

遺跡全体からの出土量を考慮して、推察すると大園遺跡では、この1号住居跡以外にも住居跡が存在する可能性が高いと思われたが、最終的にはこの1軒しか検出できなかった。

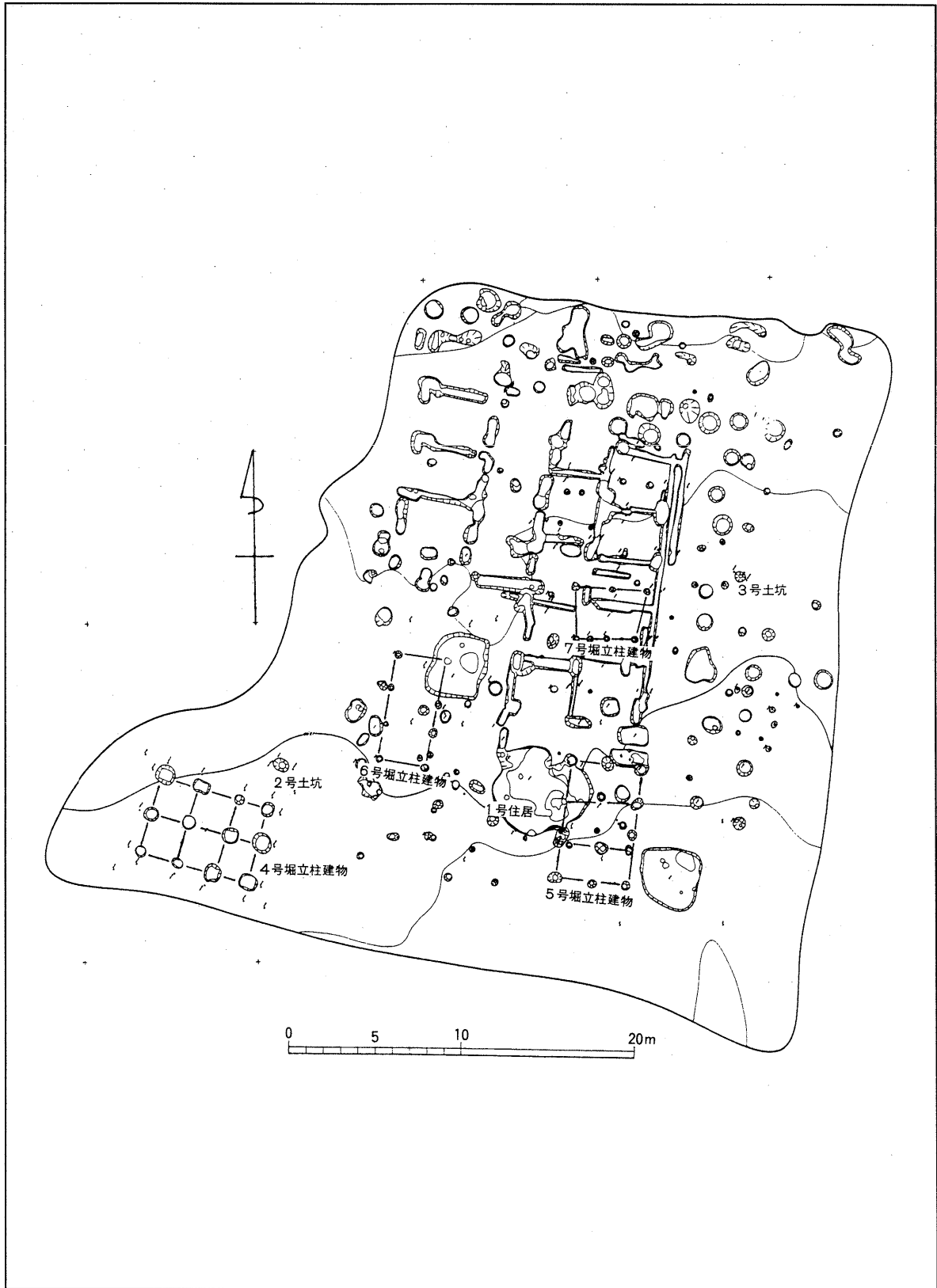
(2) 2号土坑

2号土坑は、B地区の南西部分の4号堀立柱建物の北側で検出された。この土坑は、基本土層図第Ⅳ層Ⅱ堀込む形で検出され、土坑全体には、弥生土器が約三層に18センチ程の厚さでびっしりと重なり合って検出された。土器を順番に検出して行き土器が検出されなくなったレベルで、この土坑の底部となった。この土坑では、土器が隙間なく堆積して検出されたため、埋土の状況を確認することは難しかった。検出された土器は、弥生式土器がほとんどを占めるが、土師器の一部と思われるものもあり、4～5個体分の破片が同時に埋められていることが確認された。破片の内同一個体のものと判断できるものはできる限り接合し、復元を試みたが、最終的には1個体分の復元もできなかった。土坑は、直径約60センチのほぼ円形を呈し、土坑の底は、平坦を呈し、GLから約18センチを測り込む。また、共伴した弥生土器等から明確な時代比定は困難であった。

(3) 3号土坑

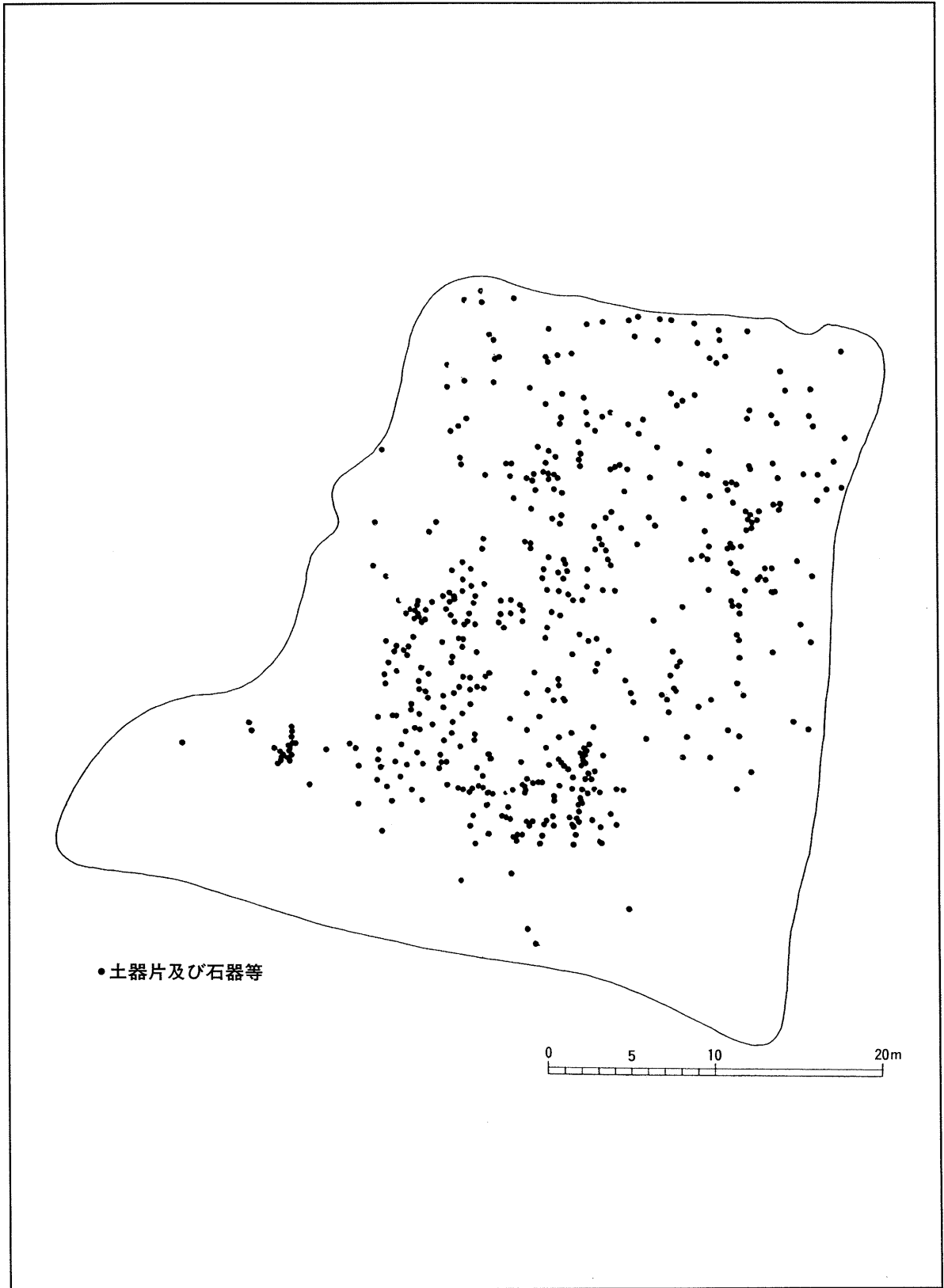
3号土坑は、B地区の東側縁辺部のほぼ中央部分で検出された。土坑は、基本土層図第Ⅳ層Ⅱ堀込む形で検出され、土坑全体は2号土坑と同じく弥生式土器が20センチ程の厚さで重なり合って検出された。この土器を順番に取り上げてゆき土器が検出されなくなったレベルで、2号土坑と同じく底部となった。この土

B地区遺構平面図



第 11 図

B地区遺物分布図



第 12 図

坑でも、土器が重なり合って検出されたため、埋土の状況を確認することは難しかった。検出された弥生土器は、同一個体のもので大型の壺の胴部であることは確認されたが、胴部の一部が復元できただけにとどまり個体の全容は、把握できなかった。土坑は、東西方向にやや長い楕円形を呈しており東西方向に90センチを測り、南北方向へ70センチを測る。土坑の底は、平坦を呈し、GLから約25センチを測り込んだ。

(4) 4号堀立柱建物

4号堀立柱建物は、東西方向を棟軸とする2間*3間の12穴からなる総柱建物である。N-72°-Wに主軸をとり、桁行間6.6m、梁間4.7mを測る。柱穴は、12穴のうち8穴は約1メートル大の隅丸方形を呈し、残りの4穴についても約60センチ程の大きさの円形のものと同丸方形のものを呈す。柱穴の底部も隅丸方形の平坦面を呈すものが多いが、その深さは概ね30センチ前後と浅かった。

(5) 5号堀立柱建物

5号堀立柱建物は、南北方向を軸棟とする2間*3間の12穴からなる総柱建物である。N-9°-Eに主軸をとり、桁行間7.1m、梁間4.1mを測る。柱穴の直径は、同じ総柱建物の4号堀立柱と比べるとその直系は小さく12穴のうち8穴は、70センチ前後を測るがその他の4穴については、30センチ前後と小さいものとなる。柱穴の深さとしては、深いものでは58センチを測り、大半は40センチ前後となる。しかし、西側に並ぶ柱穴については、1号住居跡と切り合いを呈しているため、残存状況は、15センチ~20センチと非常に良くなかった。

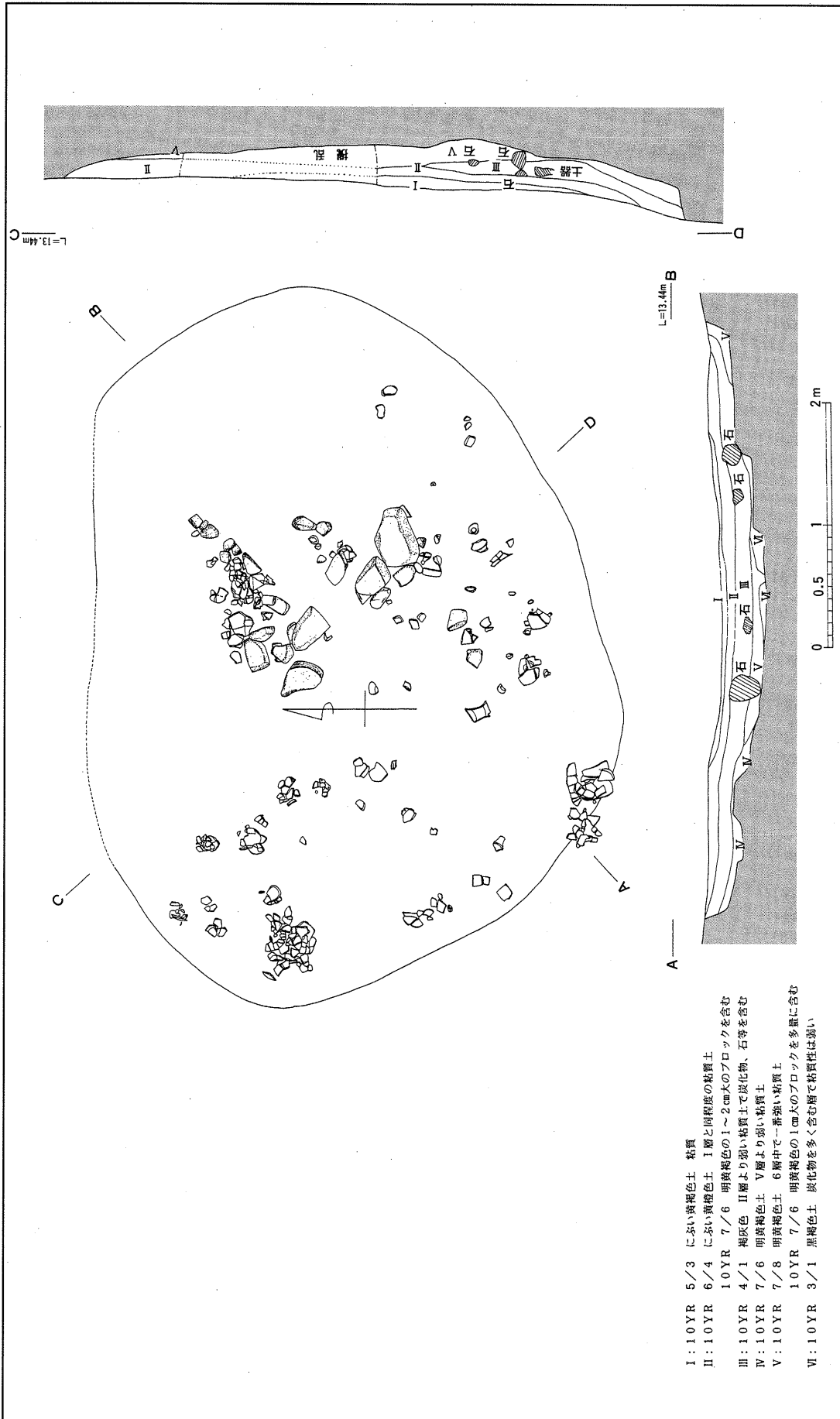
(6) 6号堀立柱建物

6号堀立柱建物は、南北方向を軸棟とする1間*3間の8穴からなる建物跡で、N-12°-Eに主軸をとる。桁行間は、6.5m、梁間は、2.9mを測る。柱穴は、直径40センチ~50センチの素堀りの円形を呈する。深さとしては、一番深いもので70センチ近くを測るが、概して50センチ前後のものが大半をしめた。

(7) 7号堀立柱建物

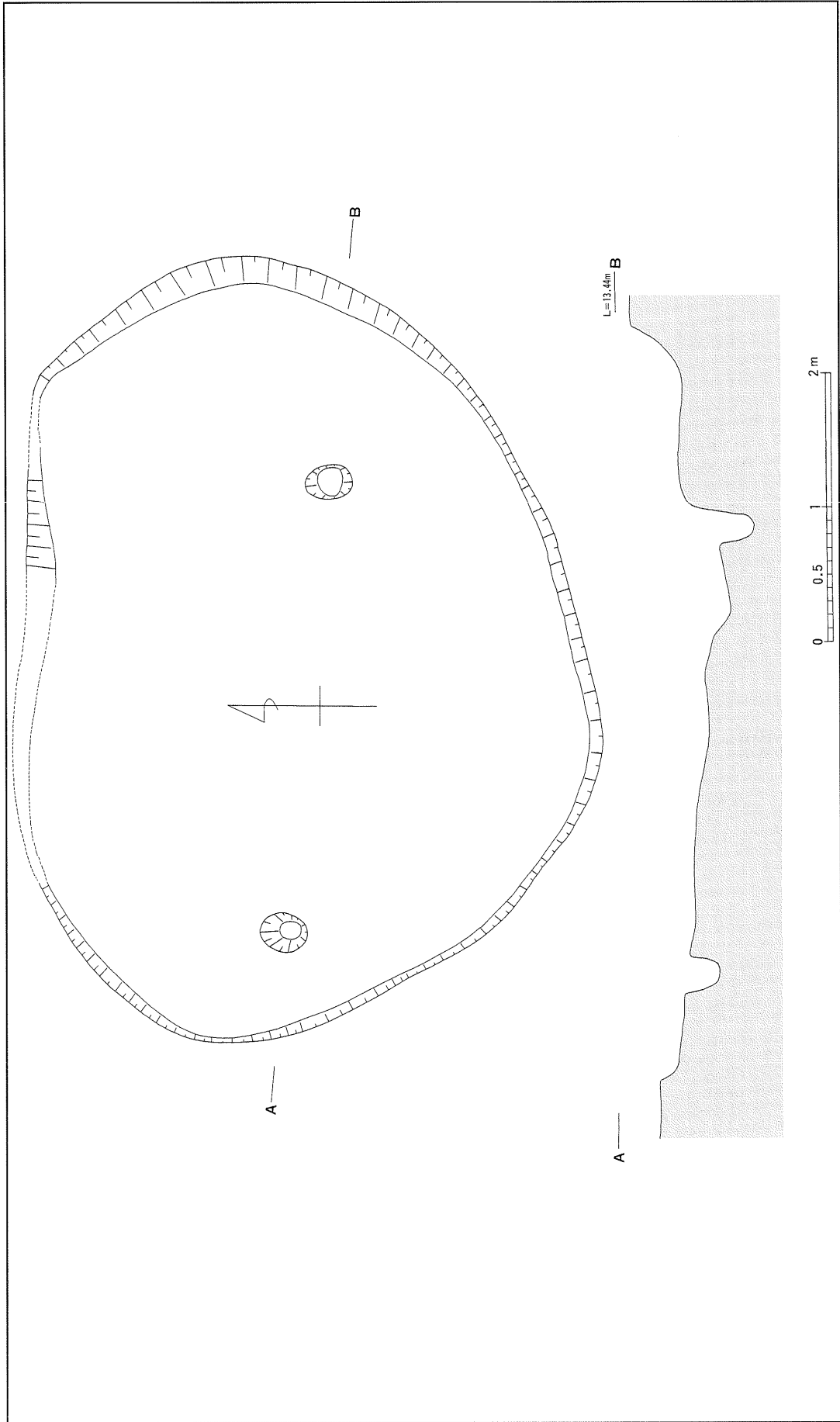
7号堀立柱建物は、東西方向を軸棟とする1間*2間の6穴からなる建物跡で、N-88°-Wに主軸を取る。桁行間は、4.0m、梁間は、3.1mを測る。柱穴は、40センチ前後の円形でほぼそろっており、素堀りを呈していた。深さは、B地区の4棟の堀立柱建物のなかでは、比較的残存状況が良く深いもので、80センチ近くを測り、そのほかにも50センチ~70センチ前後を測る。

1号住居跡遺物出土状況実測図及び土層断面図



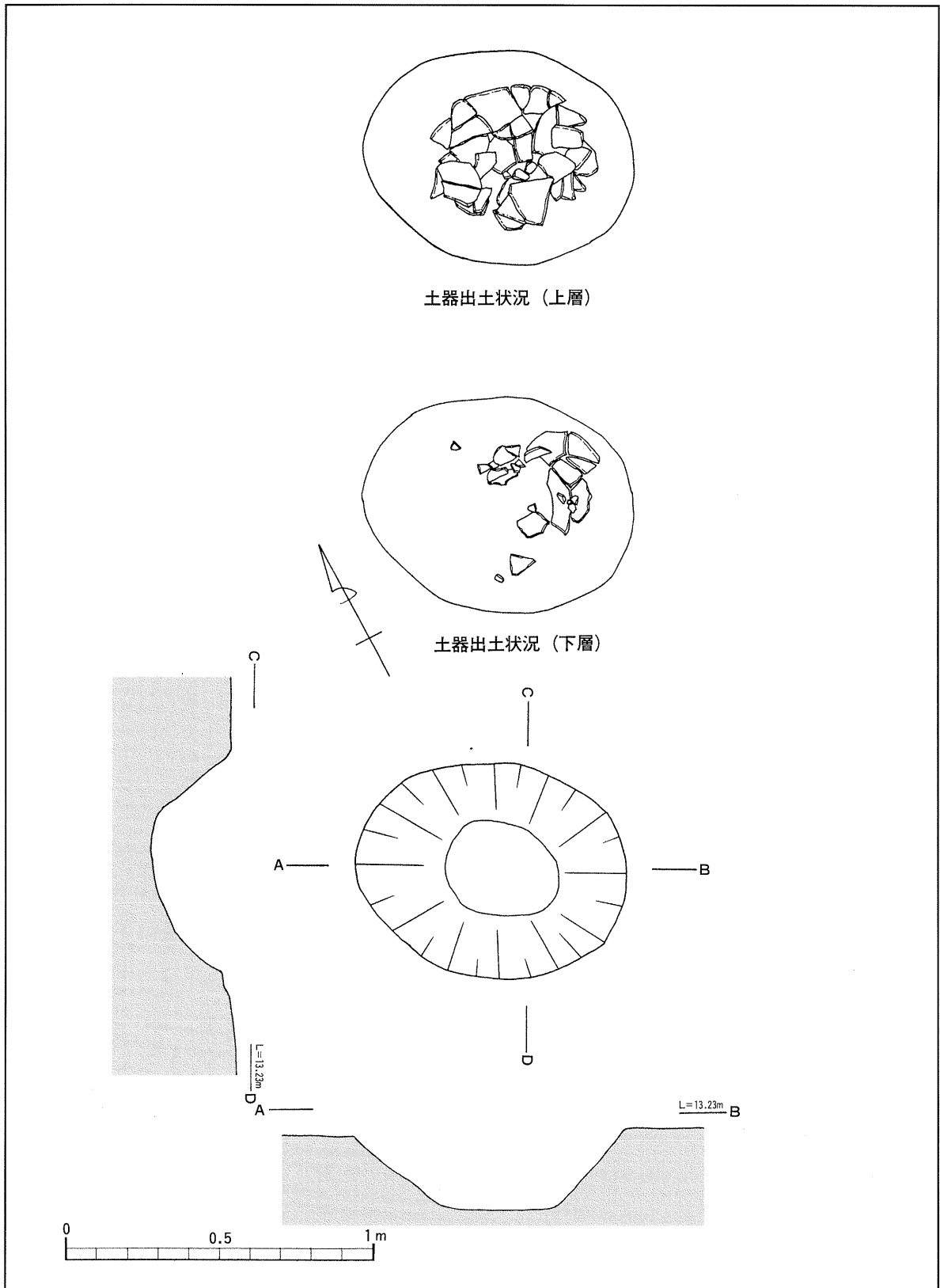
第 13 図

1号住居跡遺構実測図



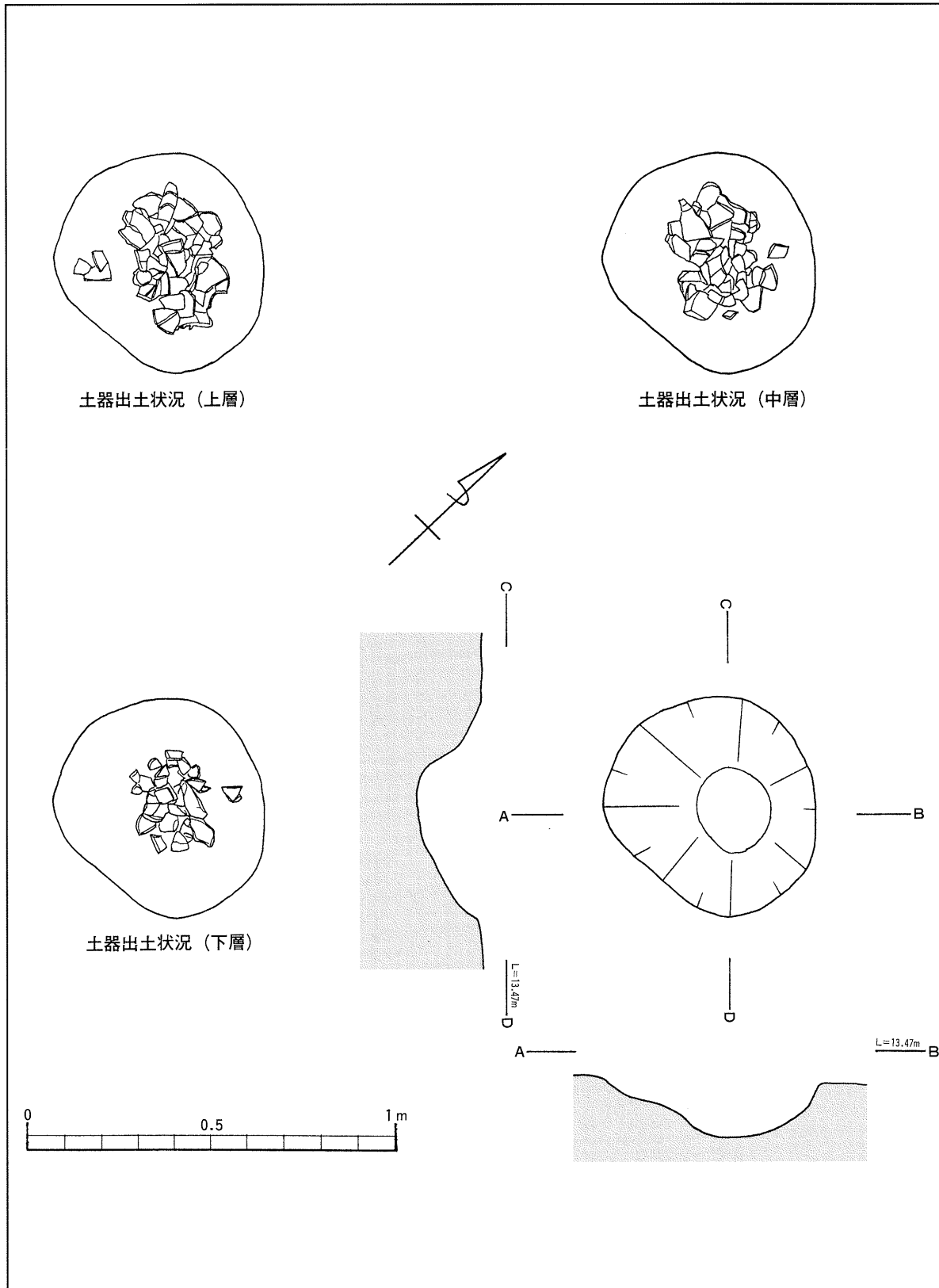
第 14 図

2号土坑遺物出土状況及び遺構実測図



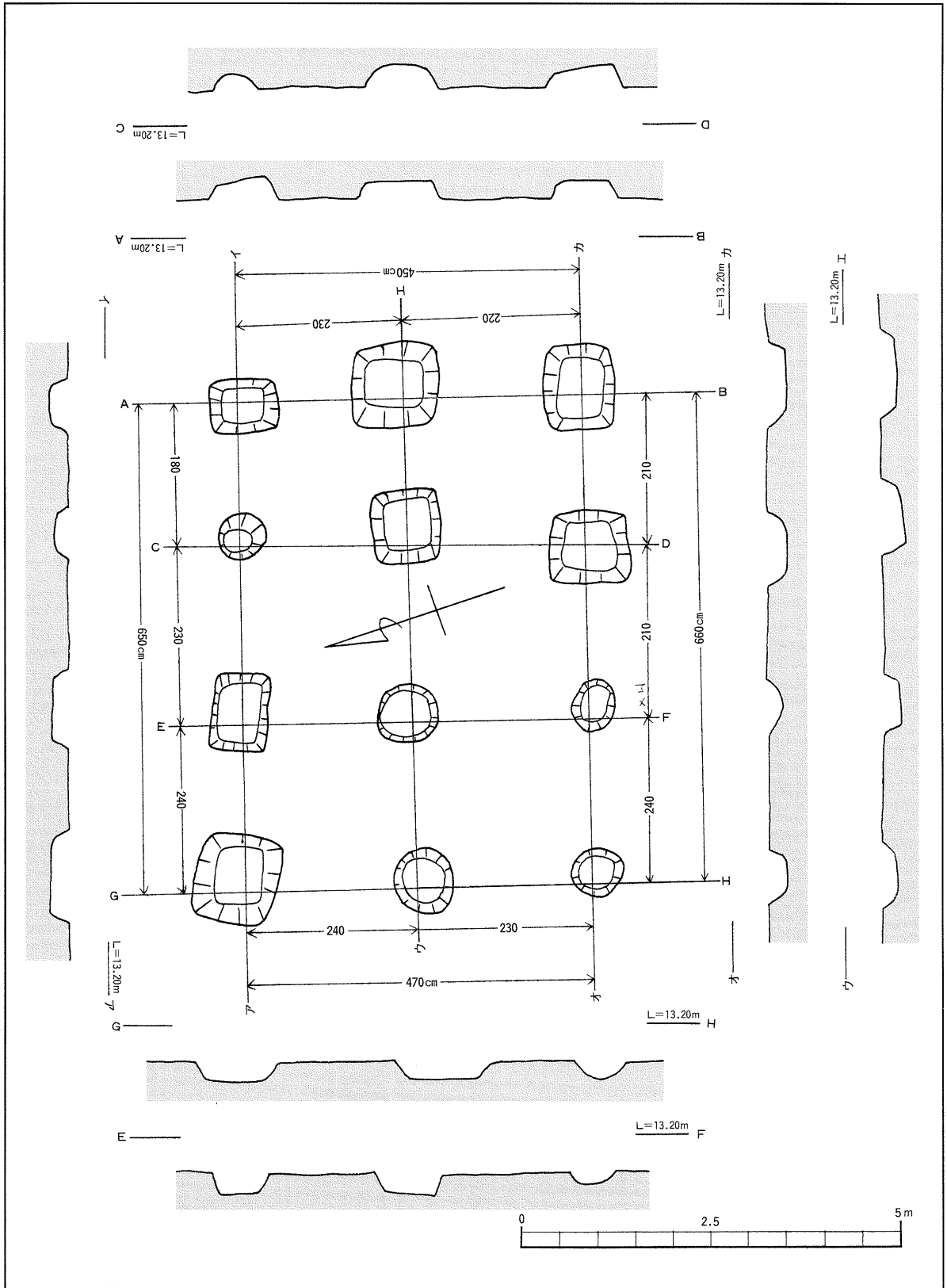
第 15 図

3号土坑遺物出土状況及び遺構実測図



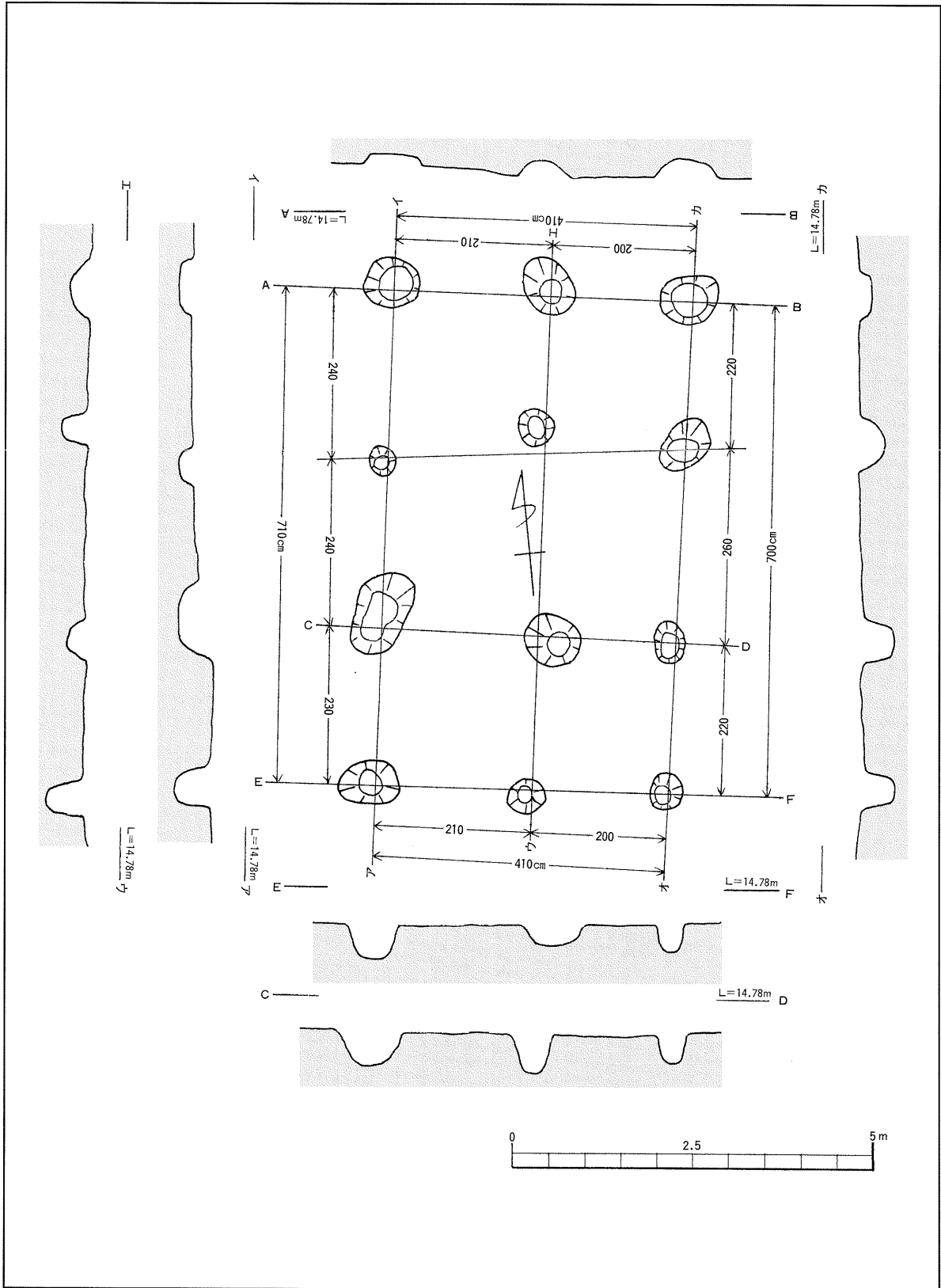
第 16 図

4号掘立柱建物実測図



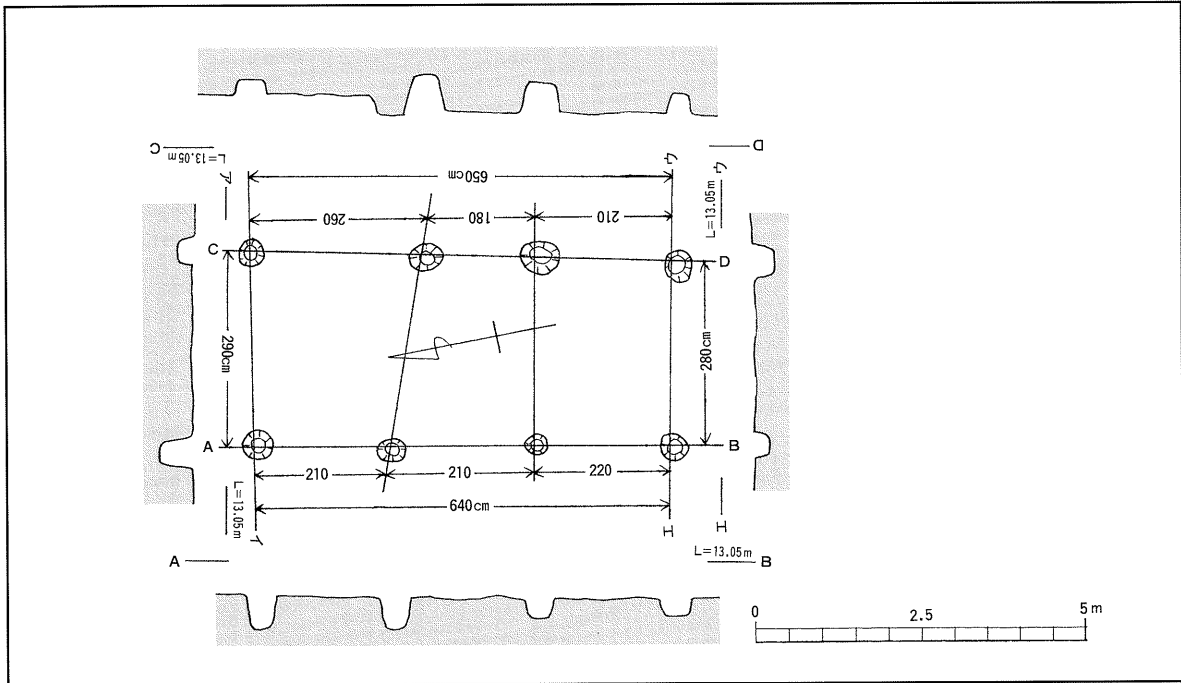
第 17 図

5号掘立柱建物实测图



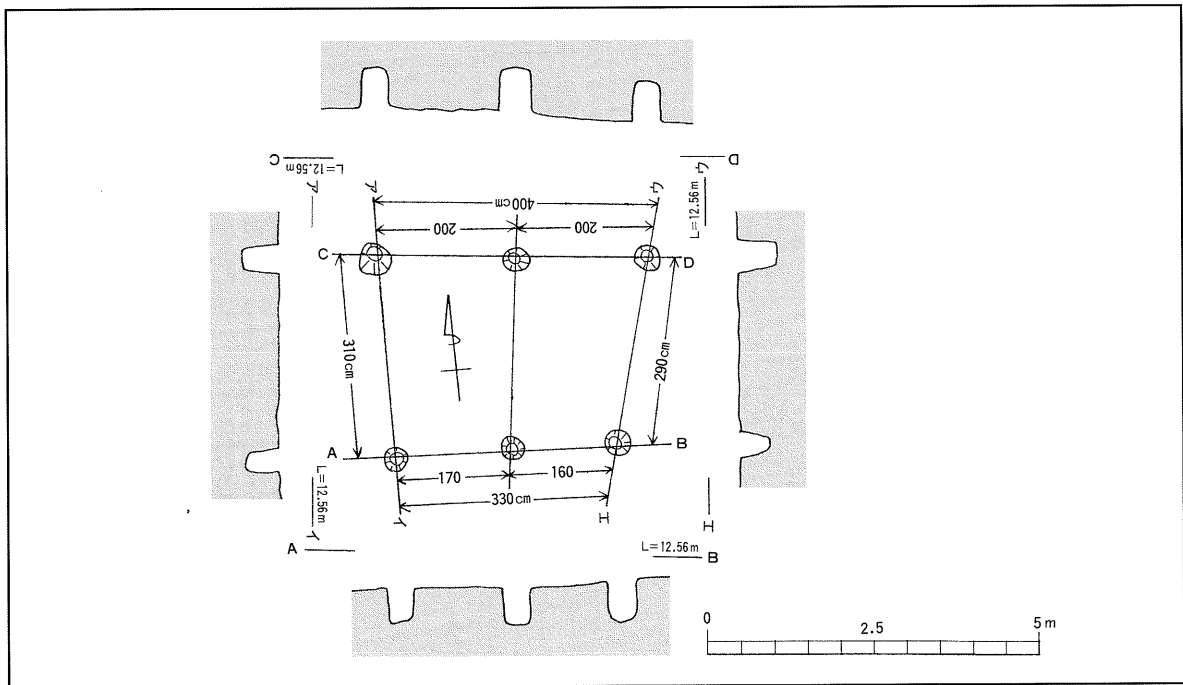
第 18 图

6号掘立柱建物实测图



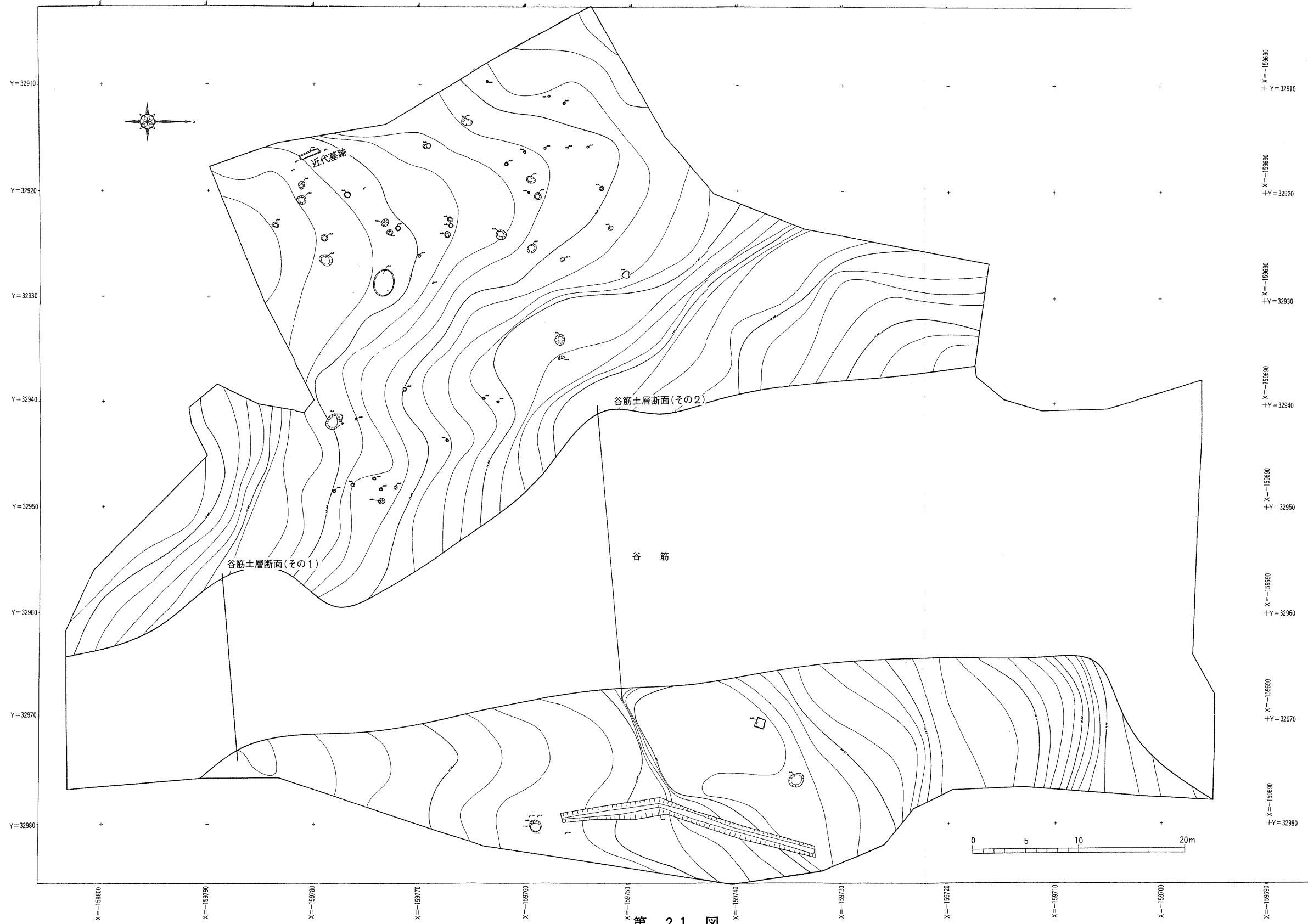
第 19 图

7号掘立柱建物实测图



第 20 图

C地区遺構平面図



第 21 図

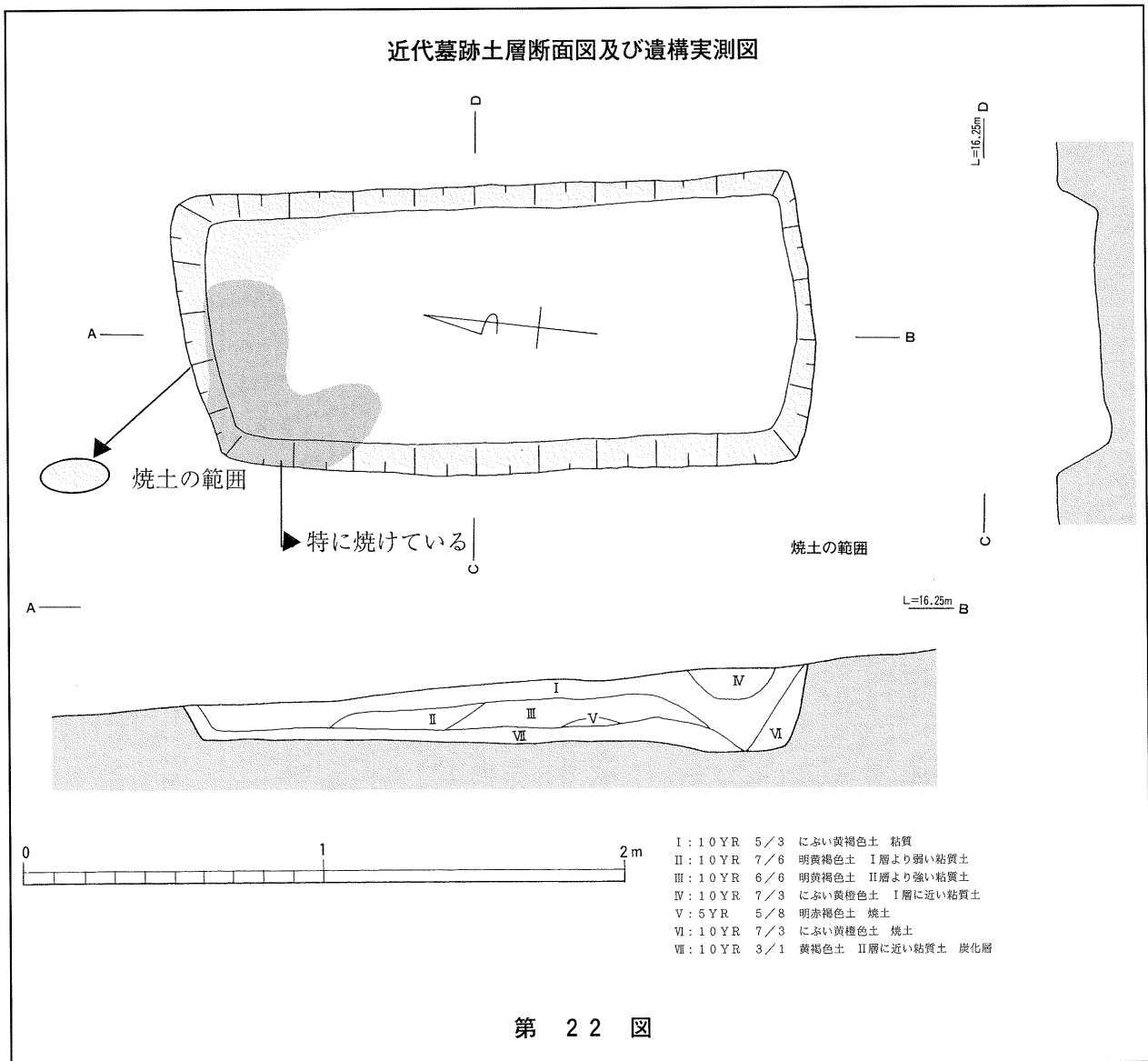
3. C地区の遺構

(1) 近代墓跡

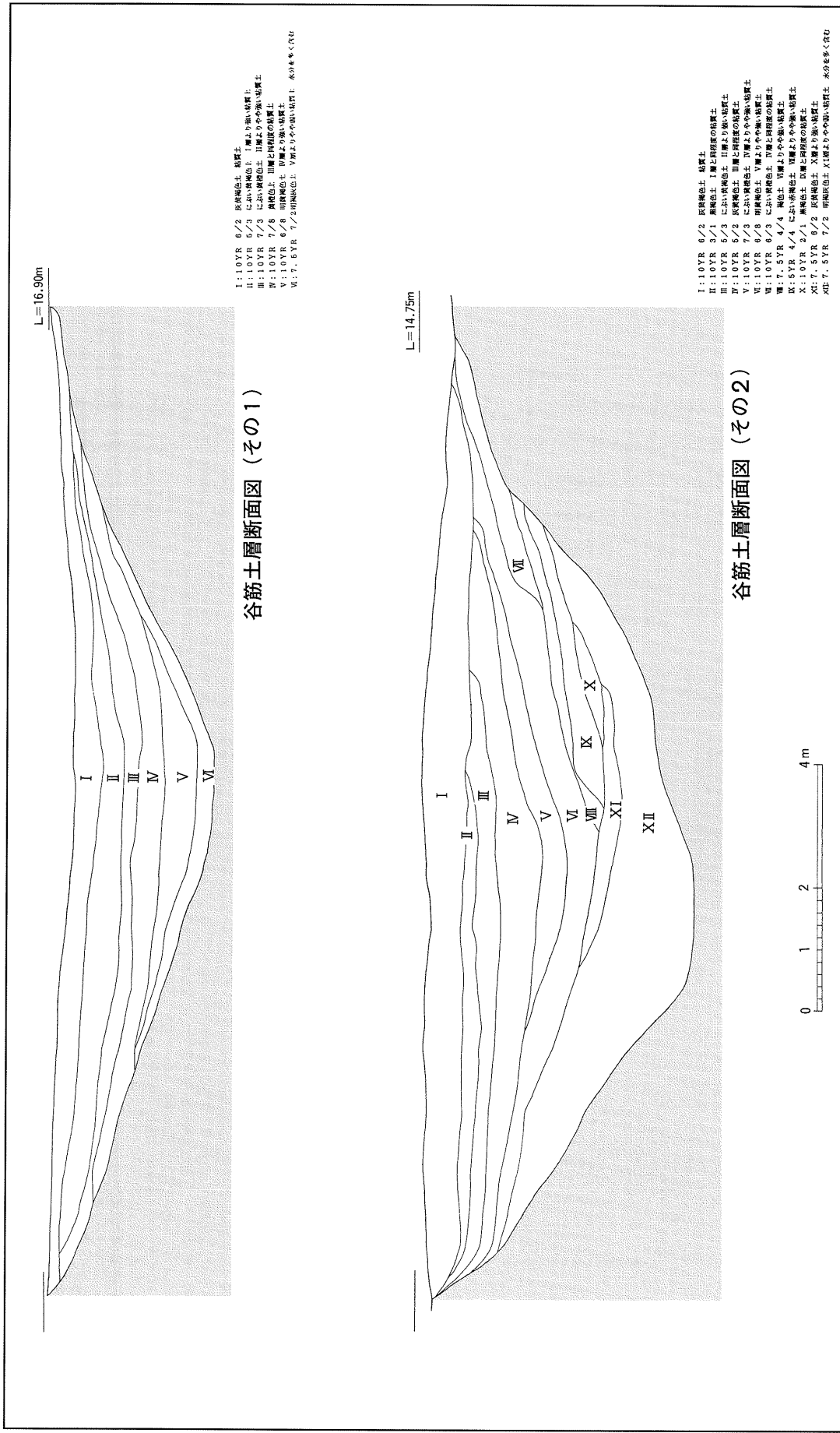
C地区は、比較的傾斜の厳しい地形を呈し、遺構らしきものは、近代墓跡を除き、地区の大半を谷筋により占められていたので検出されなかった。唯一C地区の南西隅の方で検出できた長方形のプランについては、昭和初期に墓地の造成に伴って土葬されていた方の墓跡を、白骨化するため火葬をした跡と考えられるものであった。ほぼ棺が埋められていたと思われる大きさに沿って、硬直した赤色の焼土が検出された。また、床面全体にも、赤く焼けた土が広範囲に渡って検出された。墓跡は、南北に長方形を呈し、同方向を長軸として2.0mを測り、東西方向を短軸として1.0mを測った。埋土の状況は、7層からなり、埋土のほとんどは、粘質の土壌で、焼けた跡を呈し、炭化物等多量に混入していた。

(2) その他

C地区では、近代墓の他に表土を剥ぎ遺構を検出していた状況で堀と思われるような遺構が検出されたので、その遺構面に2ヶ所の土層断面を設定して土層の堆積状況を観察した。この土層の堆積状況の観察結果から自然丘陵の間を走る谷筋であることが確認されたので、全面を検出することは建築物の基礎工事の安定性等を考慮してやむを得ず断念した。



谷筋土層断面図



谷筋土層断面図 (その1)

- I: 10YR 6/2 灰黄褐色土 粘質土
- II: 10YR 5/3 におい黄褐色土 中層より強い粘質土
- III: 10YR 7/3 におい黄褐色土 中層よりやや強い粘質土
- IV: 10YR 7/8 黄褐色土 中層と下部の粘質土
- V: 10YR 6/8 明黄褐色土 中層より強い粘質土
- VI: 7.5YR 7/2 明黄褐色土 下部よりやや強い粘質土 水分を多く含む

谷筋土層断面図 (その2)

- I: 10YR 6/2 灰黄褐色土 粘質土
- II: 10YR 3/1 黄褐色土 中層と下部の粘質土
- III: 10YR 5/3 におい黄褐色土 中層より強い粘質土
- IV: 10YR 6/3 におい黄褐色土 中層より強い粘質土
- V: 10YR 7/5 におい黄褐色土 中層より強い粘質土
- VI: 10YR 6/8 明黄褐色土 中層より強い粘質土
- VII: 10YR 6/3 におい黄褐色土 中層と下部の粘質土
- VIII: 7.5YR 4/4 黄褐色土 中層より強い粘質土
- IX: 5YR 4/4 におい黄褐色土 中層より強い粘質土
- X: 10YR 2/1 黄褐色土 中層と下部の粘質土
- XI: 7.5YR 6/2 灰黄褐色土 中層より強い粘質土
- XII: 7.5YR 7/2 明黄褐色土 下部よりやや強い粘質土 水分を多く含む

4. 堀立柱建物の分類について

大園遺跡では、合計で7棟の堀立柱建物が検出されたが、ここではその形態や規模、棟軸などから大きく4タイプに分類を行ってみたい。

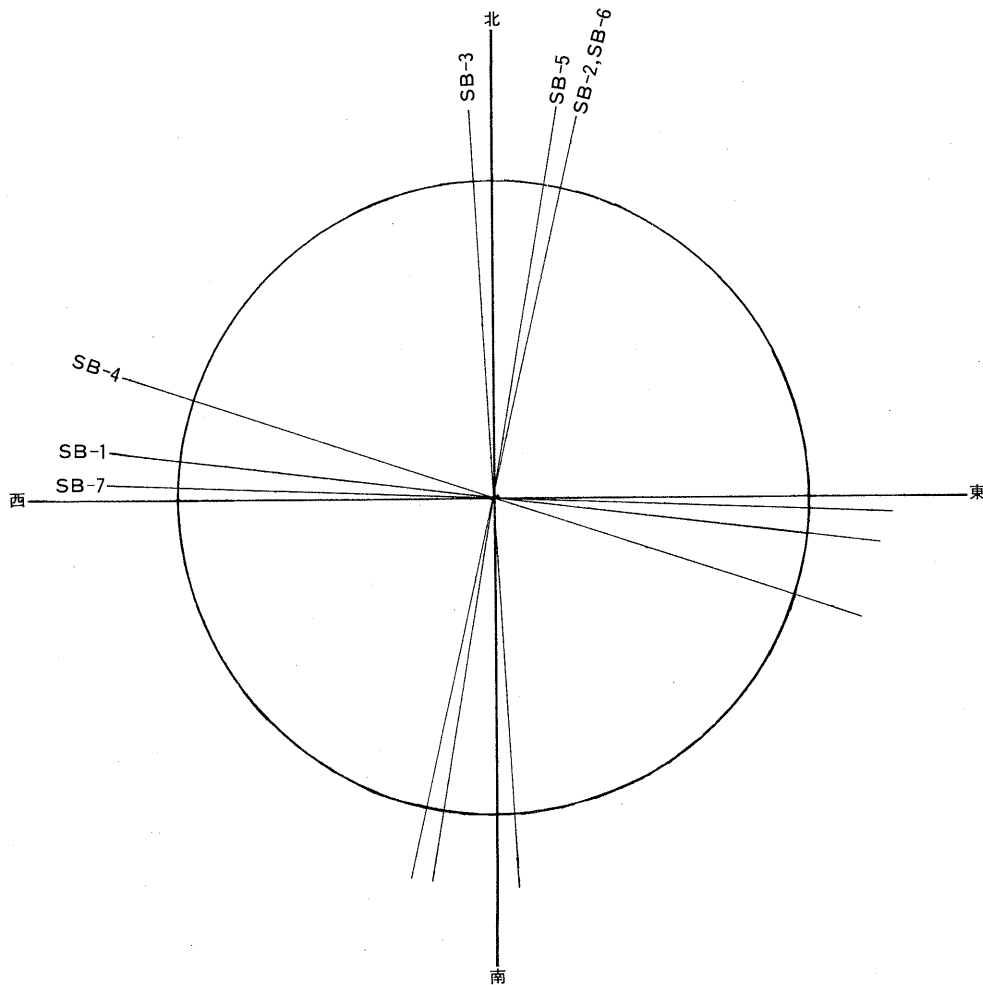
まず、I型は1間*2間の6穴からなる堀立柱建物で、3号堀立柱建物と7号堀立柱建物がこれにあたる。主軸は3号堀立柱建物が南北にとり、7号堀立柱建物が東西にとる。

II型は、1間*3間の8穴からなる堀立柱建物で、主軸を南北にとるものである。2号堀立柱建物と6号堀立柱建物がこれにあたり、両堀立柱建物ともN-12°-Eに主軸をとる方位的に一致する。

III型は、2間*3間の12穴の総柱堀立柱建物とするが、柱穴の形態からIII-A型とIII-B型とに細分化した。III-A型は、4号堀立柱建物がこれにあたり、柱穴の大きさが60センチ~1メートルと大型の隅丸方形を呈するものである。III-B型は、1号堀立柱建物と5号堀立柱建物がこれにあたり、柱穴は円形の40センチ~50センチ前後の素掘りのものである。主軸は、それぞれ東西と南北にとる。

大園遺跡で検出された堀立柱建物について、時代を明確にできる共伴遺物は検出できなかった。また柱穴内の埋土の堆積状況等からも時代を決定することは困難であった。棟軸やその形態から分類を行ってはみたが、年代的な位置づけとの関連は、今後の資料の増加と研究を待ちたい。

堀立柱建物主軸別構成グラフ



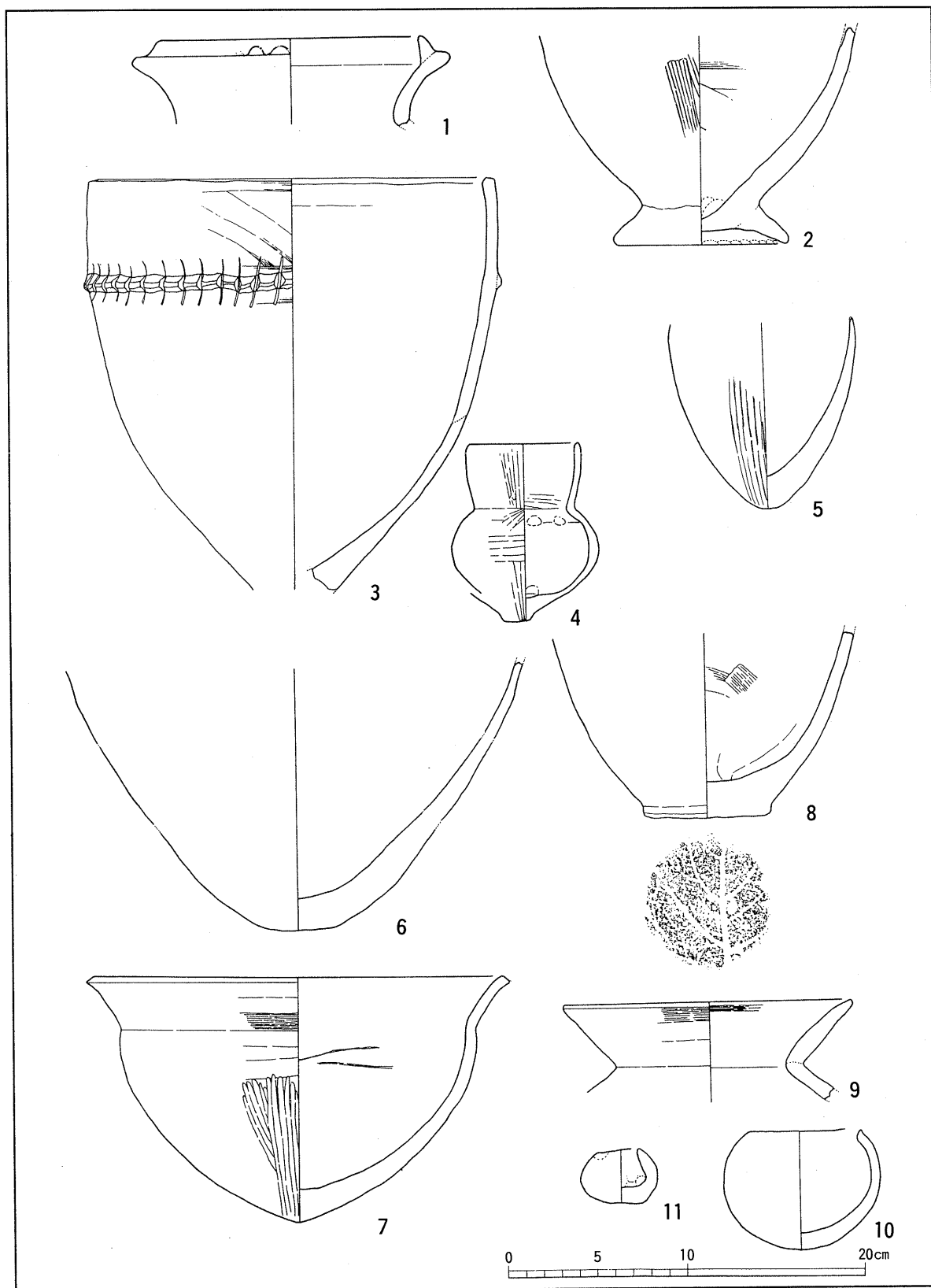
グラフ 1

堀立柱建物一覽表

地区	遺構番号	種別	形態	規模 (cm)	分類	備考
A 地区	SB-1	堀立柱建物	東西棟 (総柱)	2間×3間 420×620	Ⅲ-B型	N-84°-W
	SB-2	〃	南北棟	1間×3間 380×1030	Ⅱ型	N-12°-E
	SB-3	〃	南北棟	1間×2間 300×530	I型	N-3°-W
B 地区	SB-4	〃	東西棟 (総柱)	2間×3間 470×660	Ⅲ-A型	N-72°-W
	SB-5	〃	東西棟 (総柱)	2間×3間 410×710	Ⅲ-B型	N-9°-E
	SB-6	〃	南北棟	1間×3間 290×650	Ⅱ型	N-12°-E
	SB-7	〃	南北棟	1間×2間 310×400	I型	N-88°-W

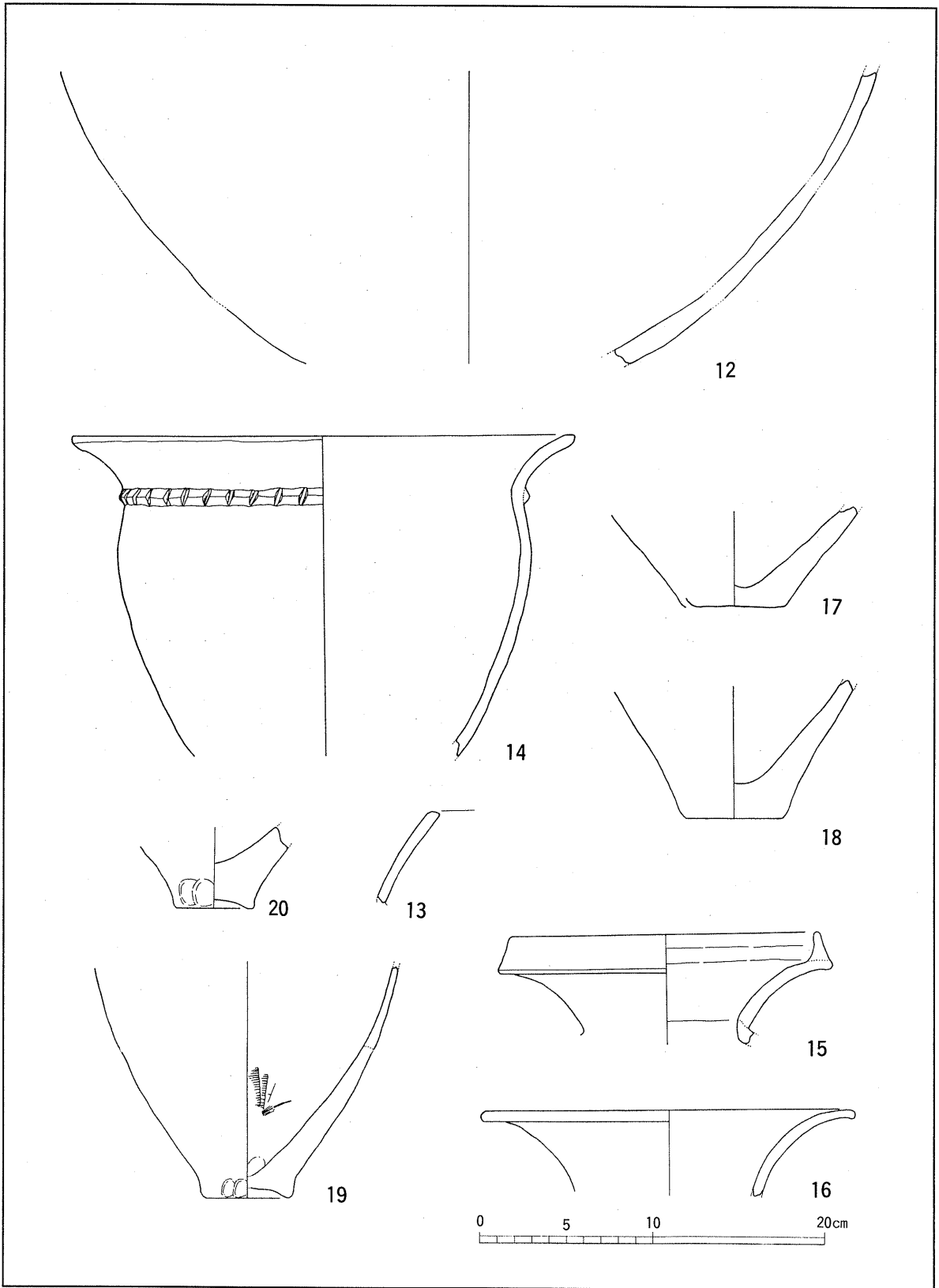
第 2 表

A地区出土遗物



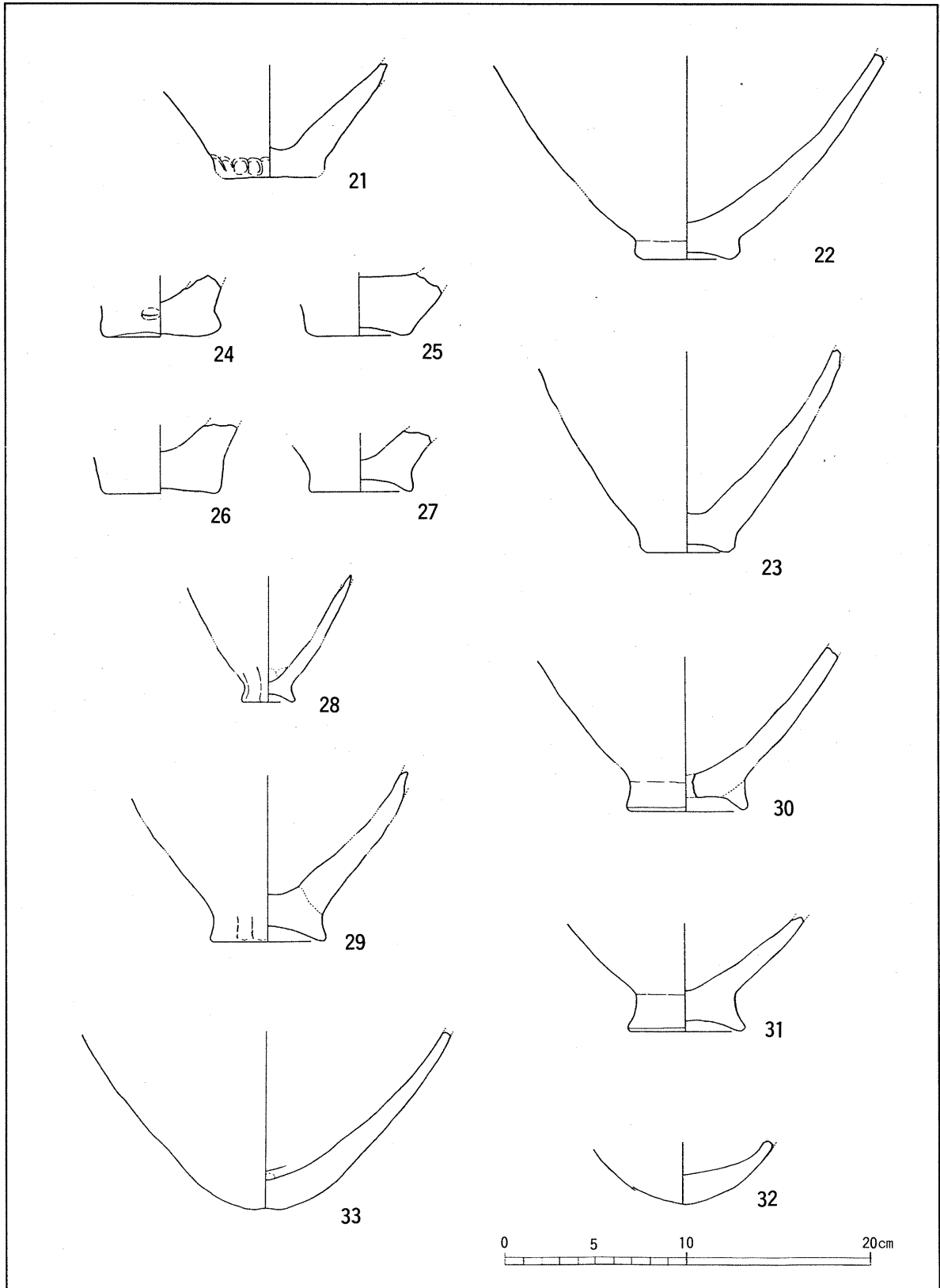
第 24 图

B地区出土遺物（その1）



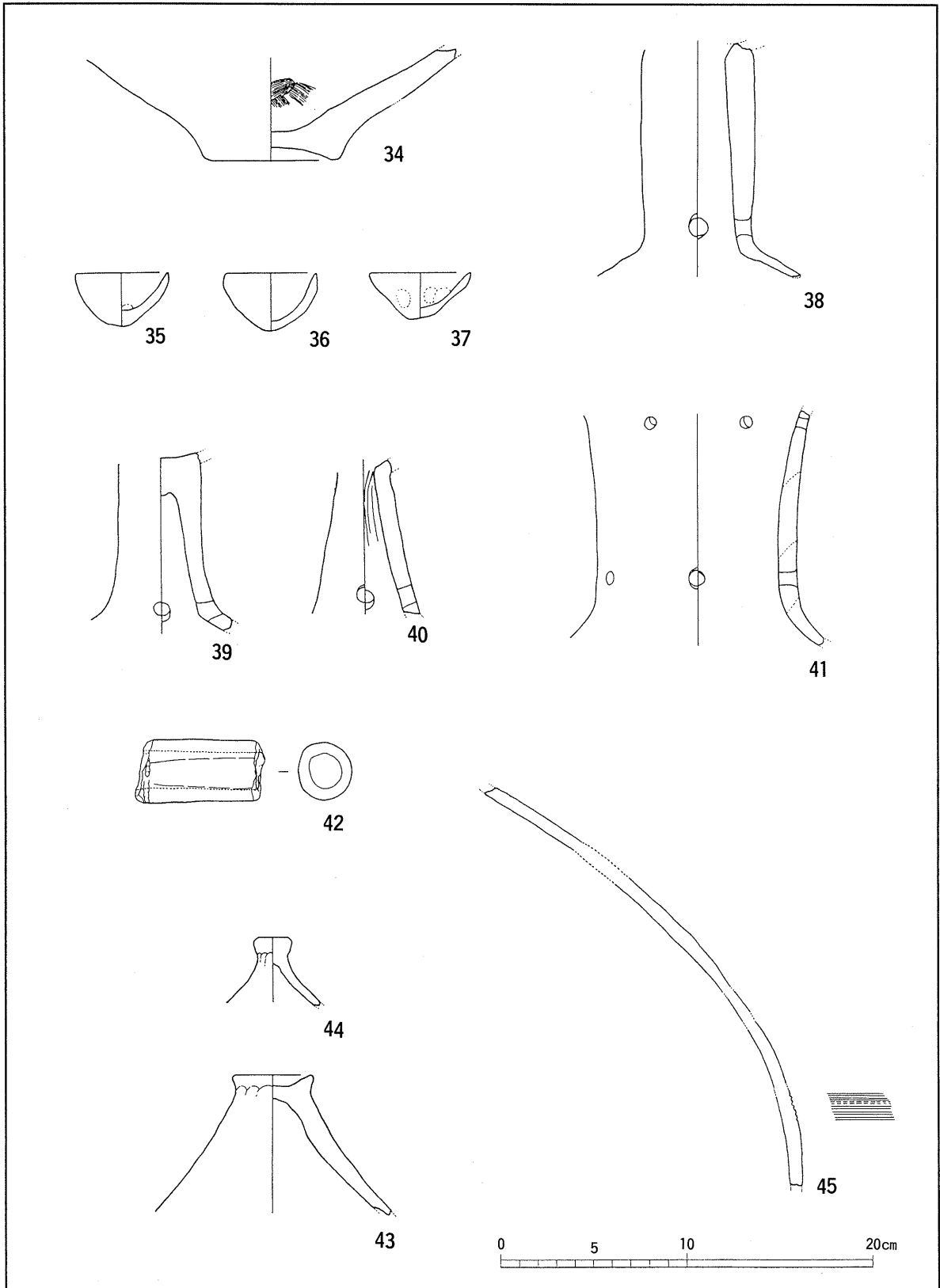
第 25 図

B地区出土遺物（その2）



第 26 図

B地区出土遺物（その3）



第 27 図

第2節 遺物

1. A地区の遺物

(1) 1号土坑出土遺物

1は、1号土坑の上部より出土した複合口縁で、風化の為非常に視認しづらいが非常に不規則で乱雑な波状紋がかすかに残存している。樹根による攪乱層の直下より検出された土坑であるためこの口縁部と土坑の関連は断定はできない。

(2) その他の遺物

2～5は、1号土坑の近辺にて検出された遺物である。2は、甕の底部と思われるもので貼り付けの脚台を持つ底部で、指頭痕が認められる。3は、甕の口縁部から底部付近にかけての破片である。口縁部から約5センチ下がった部分に刻み目突帯を有する。口径は、21センチを測る。4は、小型丸底壺の完形品で口径は、6センチ、器高は、10センチを測る。A地区で出土している遺物の中では、この小型丸底壺のみ、その胎土や調整の丁寧さなど類を見ない。古墳時代初等の土器ではないかと思われる。5は、坏の完形品で口径は、10センチ、器高は、10.5センチを測る。やはり、1号土坑の近辺で4の小型丸底壺とほぼ同レベルで出土した。攪乱層中での出土であるので时期的な関連性は、ないものと思われる。

6は、平坦な部分を若干有する甕の底部と思われ、全体的には丸底である。底部付近に楕円形の黒班がみられる。

7は、鉢の完形品で口径23.2センチ、器高13.8センチを測る。遺構に伴った形での出土ではないが、宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第4集 前原北遺跡の報告書において行われている土器の編年表によると、前原北Ⅲ式に分類されている鉢に比定できるのではないかと思われる。

8は、甕の底部で平底を呈している。特筆すべきは、底部に葉痕が認められることである。また、内部には、指頭による調整の痕と黒班が認められる。

9は、壺の口縁部で、口径16.2センチを測る。古墳時代の物ではないかと思われる。

10は、小型丸底壺の完形品で、口径7センチ、器高6.8センチを測る。内外面とも風化が激しく調整を確認することはできなかった。

11は、ミニチュア土器で、柱穴の中に流れ込んだ埋土に混じって出土した。完形品で口径は、2.3センチ、器高は、3センチを測る。内外面とも黒灰色を呈し、大園遺跡で出土したミニチュア土器の中では、この土器だけ色調を逸する。

2. B地区の遺物

B地区出土の遺物は、1号住居跡より出土した遺物はその大半を占める。土坑等から出土した遺物について記述した後、1号住居跡出土遺物について分類を行いながらの記述としたい。

(1) 2号土坑出土遺物

12は、2号土坑より検出された壺の胴部の下半分である。内外面とも風化のため調整などを確認することはできなかった。

(2) 3号土坑出土遺物

13は、3号土坑から検出された甕の口縁部である。

(3) その他の遺物

14は、柱穴内の埋土から検出された甕で頸部がしまり、口縁部が外反し、刻み目突帯を有する。このタイプの土器は、宮崎市及びその近郊の遺跡で検出されており、弥生時代終末期のものであることが多い。

(4) 1号住居跡出土遺物

①口縁部

I類：壺の複合口縁部で、15の口縁部をこれに分類する。口径は、17.8センチを測る。内外面とも風化が激しく調整は、確認することが難しかった。

II類：16の口縁部がこれに属し、壺の口縁部で頸部から外反しながら、水平方向に延びるものをこの型の範疇とする。口径は、21.2センチを測り、調整は確認できなかった。

②甕の底部

I類：17、18をこれに分類する。底部と胴部の境は明瞭だが、外反しないもので、平底となるものである。17は、底径6センチを測り、18は、5.5センチを測る。双方とも風化が激しく調整は、確認できなかった。

II類：19～27にあたる底部をこの分類とする。底部と胴部の境が明瞭で、外反するもの。細かく細分すると平底となる21と24、やや上げ底となる22、25、26と著しい上げ底となる19、20、23、27とに分けられる。また、19～21と24には、内外面に指頭痕が認められる。その他は風化のため調整の確認はできなかった。

III類：底部と胴部の境が「く」の字に外反し、外面はヘラ削りにより調整を施されている。28～31までの底部がこの分類となる。28は、底径2.9センチを測り、内面に指頭痕が認められる。29は、底径6.3センチを測り、外面は縦方向のヘラなどを呈するが、内面は調整を確認できない。30は、底径6.7センチを測り、脚台部分は貼り付けられており、外面は、横方向のなで調整を呈する。A地区出土の2の底部とその貼り付け脚台の様式が類似している。31は、底径6.1センチを測り、調整については内外面とも風化のため確認できなかった。

③壺の底部

I類：丸底のもの。32の底部がこの範疇となる。内外面の調整については、風化のため不明。

II類：胴部と底部の境に明瞭な段を持たない平底のもの。33がこの分類となる。外面は、風化のため調整は不明であるが円形の黒班が認められる。内面は、一番深部に指頭痕が認められつづけてヘラなどが施されている。

④鉢の底部

I類：底部と胴部の境に明瞭な段を持ち外反するもの。鉢の底部では、34のみの出土であった。外面はなで調整、内面はハケメの調整が確認される。上げ底となる。

⑤ミニチュア土器

I類：35～37をこの分類とする。35は、完形品で口径4.9センチで内外面とも指頭痕が認められ、内面には黒班が認められた。36も完形品で、口径4.8センチを測り、内面は、なで調整、外面は風化が激しく不明。黒班が内面に認められた。37は、ほぼ完形品で、口径5.4センチを測り、内外面とも指頭痕がみとめらるが、黒班はなかった。

⑥高坏の脚部

I類：脚柱部から裾部が大きく屈曲し、脚柱部がエンタシス状を呈するもので脚柱部と裾部との境に円形の透かしをもつもの。38がこれに含まれる。

II類：脚柱部から裾部が大きく屈曲し、屈曲が緩やかなもの。脚柱部と裾部の境には、円形の透かしが認められる。39をこの分類に含める。

III類：脚柱部が円錐状を呈し、その上部には、しぼりが認められる。また脚柱部の最下部には、円形の透かしが認められる。40をこの分類に含める。

⑦器台

I類：41がこの分類に属するが、これ以外には器台の出土は認められなかった。住居跡からの器台の検出

は、これ1点のみで胴部の上下それぞれに4ヶ所の円形の透かしが入れられている。透かしの大きさは、上下ともほぼ同じ大きさで約8ミリ程である。住居跡から出土した遺物は全体的に焼成が悪く風化も進んでいるが、この器台は特に激しい。

⑧ 轆 (羽口)

42は、轆の完形品で、外面は風化が進んでいるが二次焼成を受けた後が顕著に伺える。住居跡及び遺跡全体からも轆としては、これ1点のみである。

⑨ 蓋

I類：43と44は、ともに蓋のつまみ部分である。住居跡からは、この他にもいくつか蓋のつまみ部分と思われるものが検出された。双方とも調整は、風化のため確認できないがつまみの部分に指ナデによる調整のあとが認められる。

⑩ 胴部

45は、壺の胴部の一部であるが分類は行わない。胴部としても全体を復元できるだけは出土していないが胴部の一部から推察した大型のものには違いないようである。特徴としては、6条の櫛描き直線紋が施されていることがあげられる。

3. C地区の遺物

C地区では、遺物がほとんど検出できず、特筆すべき出土遺物も認められなかった。

第IV章 自然科学分析

第1節 炭化材の樹種同定結果について

1. 試料

試料は、弥生時代後期とされる住居跡から出土した炭化材である。

2. 方法

試料は割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面・放射断面・接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。樹種同定はこれらの試料標本をその解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

3. 結果

結果を以下に示し、同定根拠となった特徴を記す。また図版に各断面の顕微鏡写真を示す。

試料	樹種（和名／学名）
炭化材	スダジイ <i>Castanopsis sieboldii</i> Hatusima

スダジイ *Castanopsis sieboldii* Hatusima ブナ科

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

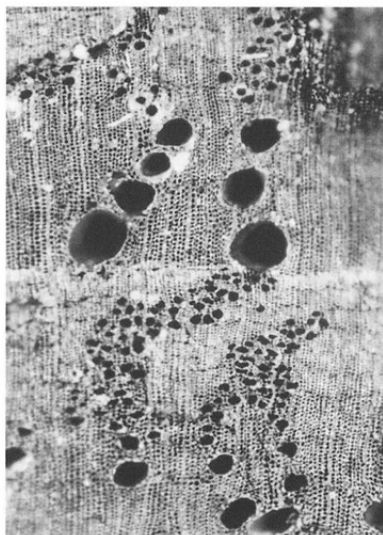
接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりスダジイに同定される。スダジイは本州（福島県、新潟県佐渡以南）、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽、保存性やや低く、建築、器具などに用いられる。

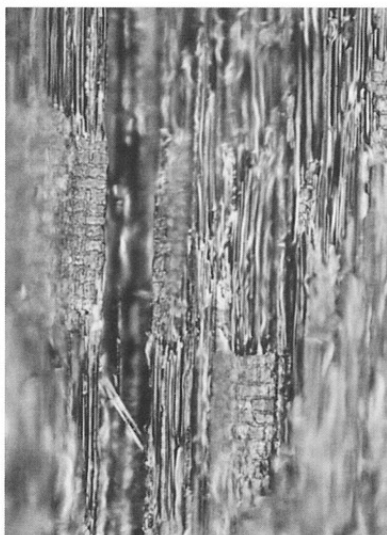
参考文献

佐伯浩・原田浩(1985)広葉樹材の細胞。木材の構造，文永堂出版，P.49-100.

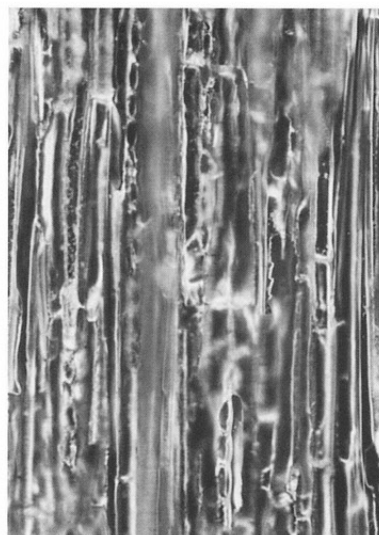
柿ノ木平遺跡出土炭化材の顕微鏡写真



横断面 ————— :0.4mm
炭化材 スダジイ



放射断面 ————— :0.2mm



接線断面 ————— :0.1mm

第2節 放射性炭素年代測定結果について

1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No 1	B地区1号住居跡	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン合成	β 線法
No 2	B地区1号住居跡 焼石下部炭化層	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 石墨調整	加速器質量 分析(AMS)法

2. 測定結果

試料名	^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年BP)	暦年代 交点 (1σ)	測定No (Beta-)
No 1	1890 \pm 70	-28.9	1830 \pm 70	AD220 (AD110~260)	92435
No 2	1630 \pm 50	-14.6	1790 \pm 50	AD245 (AD210~330)	92436

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(1950年AD)から何年前(BP)かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を補正することにより算出した年代(西暦)。補正には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値を使用した。この補正は10000年BPより古い試料には適用できない。暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。 1σ は補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1σ 値が表記される場合もある。

弥生土器観察表(1)

地区	遺構	No	器種	部位	法量	調整	胎土	焼成	色調	備考
A 地 区	1号土杭	1	壺	口縁部	口径 14.8cm	風化の為 不明	2～4mm大の砂粒、 小礫を多く含む	良好	内外面ともに黄橙色	
	No付	2	甕	底部	底径 9.0cm	風化の為 不明	1～2mm大の	良好	(外)明黄白色 (内)明灰色	
	〃	3	甕		23.0cm		1mm大の砂粒	良好	(外)にぶい乳白色 (内)淡黄褐色	
	〃	4	埴	完形	口径 6.2cm	(外)ミガキ (内)ミガキ・ヨコナデ・ 指頭痕	精緻	良好	(外)にぶい乳白色 (内)乳白色	
	〃	5	坏	ほぼ完形 (口縁部欠損)	—	風化の為 不明	精緻(1～2mm大の砂粒を含む)	良好	(外)淡黄褐色 (内)にぶい黄褐色	
	〃	6	壺	底部(丸底)	—	風化の為 不明	1～2mmの砂粒を含む	良好	(外)明黄褐色 (内)灰黄色(黒班)	
	〃	7	鉢	完形	口径 23.2cm	(外)ミガキ・ヨコナデ (内)ヘラナデ	1～3mm大の砂粒	良好	内外面ともに明黄橙色	
	〃	8	甕(?)	胴～底部 (葉痕)	底径 6.5cm	指頭痕 粘土と積み あげ灰のナデなどが ない	1～3mm大の砂粒を 多量に含む	良好	(外)黄白色 (内)淡黄褐色(黒班)	
	〃	9	壺(?)	口縁部	口径 16.2cm	風化の為 不明	石英、白石、角セン 石(精緻)	良好	(外)淡赤褐色 (内)淡黄褐色	
	〃	10	小型丸底 壺(埴)	ほぼ完形	口径 7.0cm	風化の為 不明	精緻 砂粒を含む	良好	内外面ともに黄橙色	
	〃	11	ミニチュア 土器	完形	口径約2.3cm	指頭痕	精緻 砂粒を含む	良好	内外面ともに黒灰色	
B 地 区	2号土杭	12	壺	胴部(下半)	—	風化の為 不明	2～4mm大の小礫を 多く含む	良好	内外面ともに黄橙色	
	3号土杭	13	甕(?)	口縁部			2～4mm大の小礫を 多く含む	良好	(外)黄橙色 (内)淡黄褐色	
	No付	14	甕	口縁部～胴部	口径 29.2cm	貼りつけ刻目突帯	2～4mm大の小礫を 多く含む	良好	内外面ともに	
	1号住居	15	壺	口縁部	口径 17.8cm	複合口縁 風化の為 不明	2～4mm大の小礫を 多く含む	良好	内外面ともに黄橙色	
	〃	16	壺	口縁部	口径 21.2cm	風化の為 不明	1～4mm大の砂粒、 小礫を多く含む	良好	内外面ともに淡黄褐色	
	〃	17	甕	底部	6.0cm	風化の為 不明	2～4mm大の砂粒、 小礫を多く含む	良好	(外)にぶい淡黄褐色 (内)淡灰黒色	
	〃	18	?	底部	底径 5.5cm	風化の為 不明	砂粒を多量に含む	良好	(外)にぶい乳白色 (内)にぶい乳白色	
	〃	19	甕	胴部～底部	底径 4.8cm	風化の為 不明	2～3mm大の小礫を 多く含む	良好	(外)黄橙色 (内)淡黄褐色(黒班)	
	〃	20	甕	底部	底径 4.4cm	(外)指頭痕 (内)風化の為不明	2～4mm大の小礫を 多く含む	良好	(外)黄橙色 (内)淡灰黒色	

第3表

弥生土器観察表(2)

地区	遺構	No	器種	部位	法量	調整	胎土	焼成	色調	備考
B 地 区	1号住居	21	?	底部	底径 5.2cm	(外)指頭痕 (内)風化の為不明	2~5mm大の小礫を多く含む	良好	(外)淡黄白色 (内)にぶい淡黄白色	
	〃	22	甕	底部	底径約9.0cm	風化の為 不明	2~4mm大の小礫を多く含む	良好	内外面ともに明淡黄橙色	
	〃	23	甕	底部	底径 4.5cm	風化の為 不明	2~4mm大の小礫を多く含む	良好	(外)黄白色 (内)にぶい黄白色(黒班)	
	〃	24	?	底部	底径約6.1cm	(外)指頭痕 (内)風化の為不明	1~3mm大の小礫を多く含む	良好	内外面ともにぶい乳白色	
	〃	25	?	底部	底径 5.8cm	風化の為 不明	2~4mm大の小礫を多く含む	良好	(外)黄橙色 (内)黒灰色	
	〃	26	?	底部	底径 6.2cm	風化の為 不明	3~4mm大の小礫を多く含む	良好	(外)にぶい乳白色 (内)灰黒色	
	〃	27	?	底部	底径 5.6cm	風化の為 不明	2~4mm大の小礫を多く含む	良好	(外)にぶい淡黄橙色 (内)黒灰色	
	〃	28	甕	底部	底径 2.9cm	(外)風化の為不明 (内)指頭痕	石英 1~3mmの小礫	良好	(外)にぶい淡黄褐色 (内)淡黄褐色	
	〃	29	甕	胴部下半~底部	底径 6.3cm	風化の為 不明	2~5mm大の小礫を多く含む	良好	(外)淡黄褐色 (内)灰淡黄褐色	
	〃	30	甕	底部	底径 6.7cm	風化の為 不明	石英 1~4mm大の小礫を多く含む	良好	(外)淡黄褐色 (内)黒灰色	
	〃	31	甕	底部(上げ底)	底径 6.1cm	風化の為 不明	3~5mm大の小礫を多量に含む	良好	内外面ともに黄橙色	
	〃	32	壺	底部	?	風化の為 不明	2~3mm大の小礫を多く含む	良好	内外面ともに黄橙色	
	〃	33	壺	底部	-	風化の為 不明	1~2mm大の砂粒を多く含む	良好	(外)淡黄褐色 (内)にぶい淡黄褐色(黒班)	
	〃	34	鉢(?)	底部	底径 6.4cm		1~3mm大の砂粒を多く含む	良好	内外面ともににぶい黄白色	
	〃	35	ミニチュア土器	完形	口径 4.9cm	指頭痕	1~2mm大の砂粒を多く含む	良好	(外)淡黄白色 (内)底は黒班 上位は黄白色(黒班)	
	〃	36	ミニチュア土器	完形	口径 4.8cm		1~3mm大の小礫を多く含む	良好	内外面ともに淡黄褐色 内面に黒班(黒班)	
	〃	37	ミニチュア土器	ほぼ完形	口径 5.4cm		2~4mm大の小礫を多く含む	良好	内外面ともに黄橙色、 黒班なし	
	〃	38	高坏	脚部	-	風化の為 不明	微砂粒(石英 白石 角せん石 雲母等)	良好	(外)淡灰色~明黄橙色 (内)黄褐色	
	〃	39	高坏	脚部		風化の為 不明	2~4mm大の砂粒、 小礫を多く含む	良好	内外面ともに黄褐色	
	〃	40	高坏	脚部	?	風化の為 不明	1~2mm大の砂粒を多く含む	良好	(外)にぶい黄白色 (内)黄白色	

第4表

弥生土器観察表(3)

地区	遺構	No	器種	部位	法量	調整	胎土	焼成	色調	備考
B 地 区	1号住居	41	器台	胴部		風化の為 不明	2～4mm大の小礫を多く含む	良好	内外面ともに黄橙色	
	ク	42	甗 (羽口)	ほぼ完形	最大径3.4cm	風化の為 不明	精緻	良好	(外)淡黄褐色(一部灰黒色) (内)灰黒色	
	ク	43	蓋	ツマミ～胴部		風化の為 不明	2～5mm大の小礫を多く含む	良好	(外)明黄褐色 (内)明黄褐色	
	ク	44	蓋	ツマミ～胴部	1.6cm	風化の為 不明 指ナデ	精緻	良好	(外)明黄褐色 (内)明黄褐色	
	ク	45	壺	胴部		(外)風化の為不明 (内)ヘラナデ ハケメ	1mm大の砂粒を多く含む	良好	(外)淡黄褐色 (内)黒灰色	

第5表

第V章 まとめにかえて

日南市における、弥生時代の集落遺跡の調査は平成7年度に実施した「影平遺跡」が初めてで、今回の「大園遺跡」の発掘調査が2例目となる。影平遺跡の調査では、弥生時代中期の集落跡が南那珂地域では、初めて検出できたという点で大きな成果を納めることができた。大園遺跡では、偶然にもこれに続く弥生時代終末期の集落跡を調査することができた。もちろん弥生時代終末期の集落跡も南那珂地域では初めての発見である。今回の調査結果から点から線へと弥生時代の様相が展開されていくことを期待したい。以下、出土した遺物と検出された遺構についてまとめてみたい。

【遺物】

今回の発掘調査では、住居跡から出土した遺物が遺構に伴う遺物としては、一番多量に出土している。その1号住居跡からは、円形の透かしを持つ高坏の脚部が3点、同じく円形の透かしを持つ脚台も1点検出された。ミニチュア土器等も3点程、検出されており、特筆すべき遺物としては、鞆（羽口）が1点と蓋のつまみ部分がいくつ検出できたことである。これら2種類の資料は、当時の食文化を考える上で、重要なヒントを示唆してくれる好資料になりうるものだと期待される。日南市に隣接する市町村で、この住居跡の出土遺物の構成と類似している遺跡調査が実施された事例としては、1996年に都城市の中大五郎第2遺跡の調査例があげられる。同調査結果では、住居跡等から出土している土器等について弥生時代終末期～古墳時代初等の年代比定がされている。同遺跡では、小型丸底壺が1号住居跡から検出されており、本市大園遺跡A地区の攪乱層から出土している小型丸底壺(10)の時代比定の参考にできる資料ではないかと思われる。また、この中大五郎第2遺跡に隣接する山ノ田第1遺跡が、平成5～7年度に宮崎県教育委員会により調査されているが、この遺跡から検出された住居跡の出土遺物の構成傾向にも類似点が伺える。この遺跡でも遺構の年代は、弥生時代終末期～古墳時代初等に比定されている。大園遺跡A地区の攪乱層では、小型丸底壺の他にほぼ完形に近い形で鉢が検出されている。同タイプの鉢は、宮崎市の「源藤遺跡」高岡町の「学頭遺跡」、宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第4集「前原北遺跡」などにその報告例が認められる。このタイプの鉢は、源藤遺跡では、弥生時代終末期に比定されており、学頭遺跡でも同時期に比定されている。前原北遺跡では、出土した一連の弥生式土器について調査にあたった北郷泰道氏により編年が示されており、このタイプの鉢は、第V期の前原北Ⅲ式の範疇に含まれ、弥生時代終末期が比定されるようである。この他に本遺跡で特徴的な遺物としては、B地区で検出された甕の口縁部から胴部のもの(14)があげられる。この甕は、きつめに外反する口縁部と頸部に刻み目の突帯を持ち、鉢と同様、源藤遺跡に類例がみられ時期も鉢と同時代に比定されている。また、1990年都城市教育委員会にて調査された「向原第2遺跡」でも同タイプの甕が検出されており、弥生時代終末期の土器として比定されている。

以上、遺構に伴うものそうでないものと列記してきたが、今回調査した大園遺跡の出土遺物の大半は、弥生時代終末期から古墳時代初等に比定できるのではないかと思われる。

【遺構】

1号住居跡から検出された炭化物については、その樹種同定と放射性炭素年代測定を行った。その結果、樹種はスダジイと判別された。この種は、建築材として利用は可能なようである。また、住居跡から採取した2つの炭化物の年代測定の結果では、補正14C年代で1830±と1790±という結果をそれぞれ得ている。検出された特徴的な遺物とこの科学的な年代測定結果から、1号住居跡は弥生時代終末期のものだと断定しても良いようである。

前回の影平遺跡の調査では、遺構としては、住居跡と土坑が検出された。影平遺跡から出土した土器の特徴からすると山之口式土器等が多量に検出されており、遺物の面からみるとこれらの土器は、大隅半島の弥生時代中

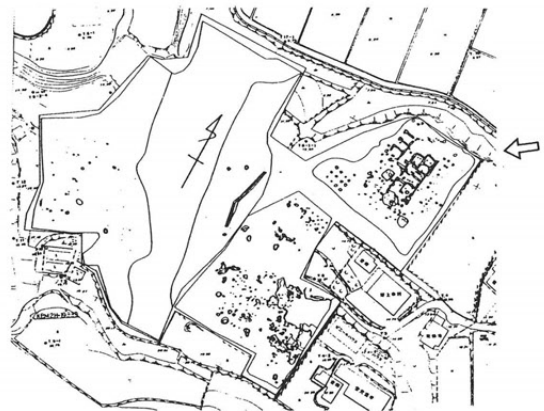
期に特徴的な土器であることから、同半島の土器文化の影響を強く受けていたことが推察された。しかし、遺構の面等からみると同半島の王子遺跡等で顕著にみられる弥生時代中期の棟持ち柱を有する堀立柱建物等は、検出できなかった。今回の大園遺跡の調査では、合計で7棟の堀立柱建物が検出された。主軸別構グラフから、分類された4つの型と主軸との間には時代的な関係があるようにも推察されるが、時代を決定する要因には、とぼしかった。住居跡や遺跡全体から出土した遺物から主な時代は、弥生時代終末期から古墳時代初等を比定できるが、堀立柱建物がこれと同じく建てられたものかどうかは、今後の資料の増加と研究を待ちたい。

この他、弥生式土器を伴う土坑が3基検出されたが、いずれも土器の保存状態が悪く、土器型式学的に時代を比定するにも接合する資料や完形品等がなかったため言及をさけない。

参考文献

- (1) 宮崎県教育委員会 『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第4集』 1988年
- (2) 宮崎県教育委員会 『学頭遺跡・八児遺跡』 1995年
- (3) 宮崎県教育委員会 『山ノ田第1遺跡』 1996年
- (4) 宮崎市教育委員会 『源藤遺跡』 1987年
- (5) 都城市教育委員会 都城市文化財調査報告書第11集『遺跡発掘調査報告』 1990年
- (6) 都城市教育委員会 都城市文化財調査報告書第31集『丸谷地区遺跡群・上大五郎遺跡』 1995年
- (7) 都城市教育委員会 都城市文化財調査報告書第34集『丸谷地区遺跡群・中大五郎第1遺跡・中大五郎第2遺跡・本池遺跡・前畑遺跡』 1996年
- (8) 日南市教育委員会 日南市埋蔵文化財調査報告書第7集『影平遺跡』 1997年
- (9) 弥生時代の堀立柱建物 資料(西日本・九州・四国)編 埋蔵文化財研究会 1991年
- (10) 鹿児島県下の弥生土器 鹿児島県考古学会 1992年
- (11) 鹿児島県教育委員会 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(34)『王子遺跡』 1985年

大園遺跡全景



図版 1

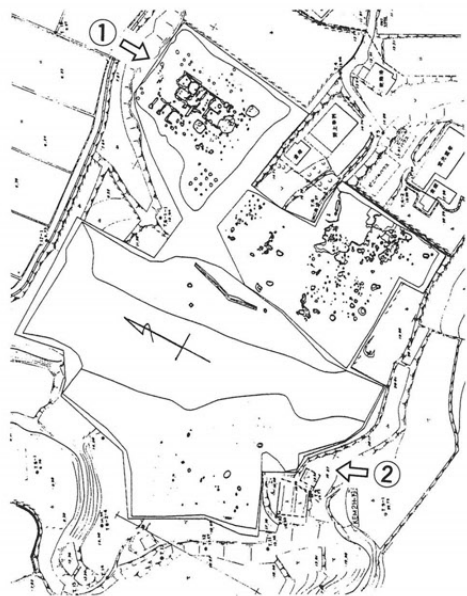
A地区、B地区、C地区調査前状況



① A地区及びB地区
調査前状況

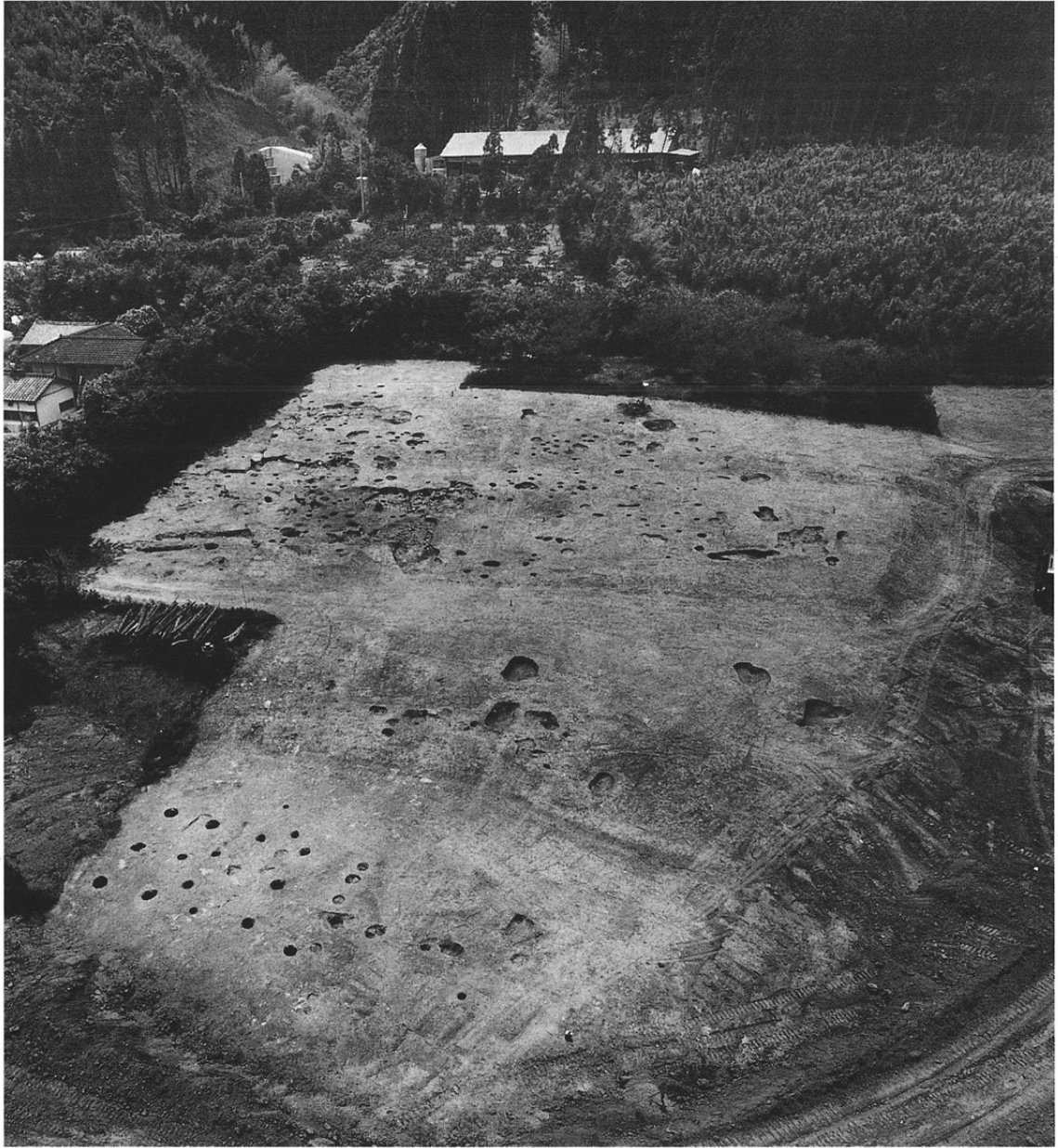


② C地区調査前状況



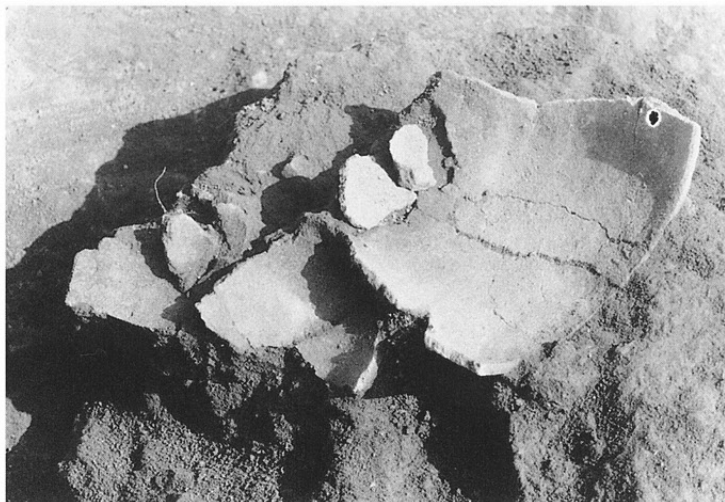
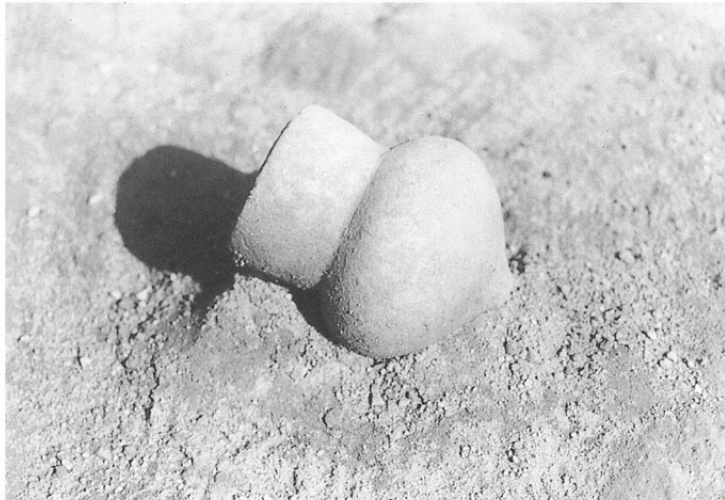
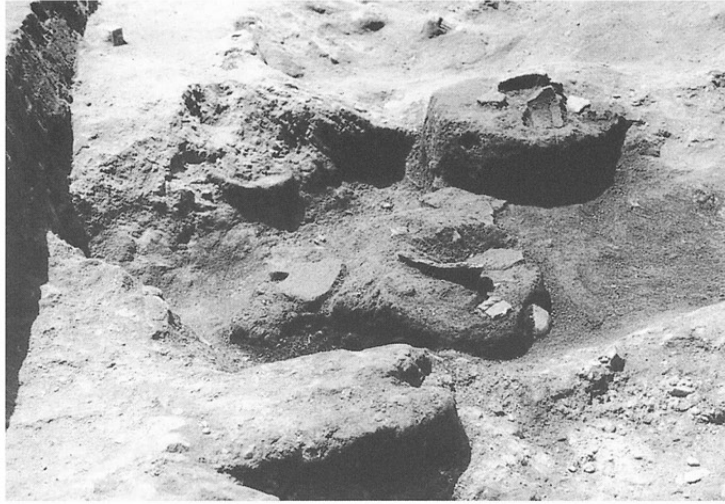
図版 2

A地区全景



图版 3

1号土坑及びA地区遺物出土状況



図版 4

1号掘立柱建物、2号掘立柱建物、3号掘立柱建物



① 1号掘立柱建物



② 2号掘立柱建物

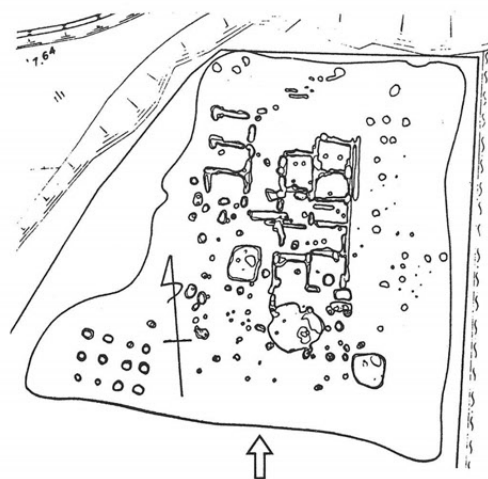


③ 3号掘立柱建物



图版 5

B地区全景



图版 6

1号住居跡遺物出土状況（その1）



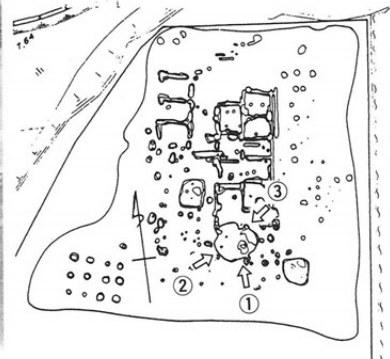
① 1号住居跡遺物出土状況
全景



② 1号住居跡遺物出土状況
近景

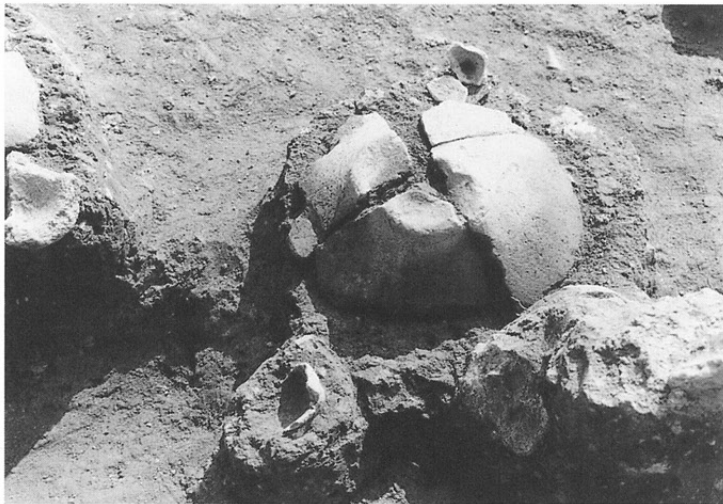
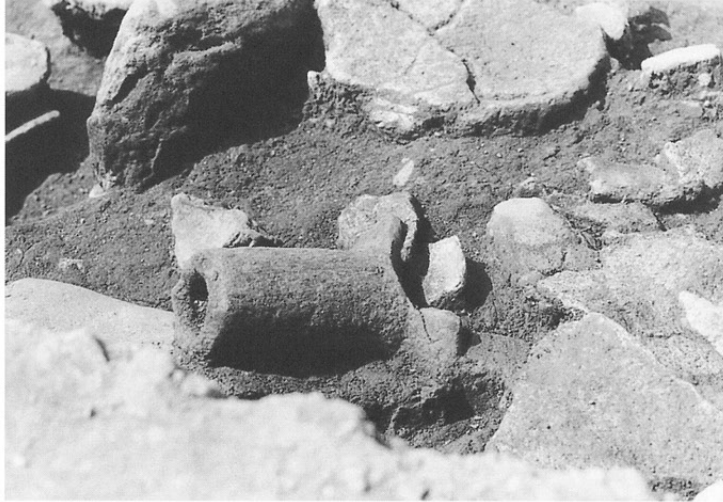
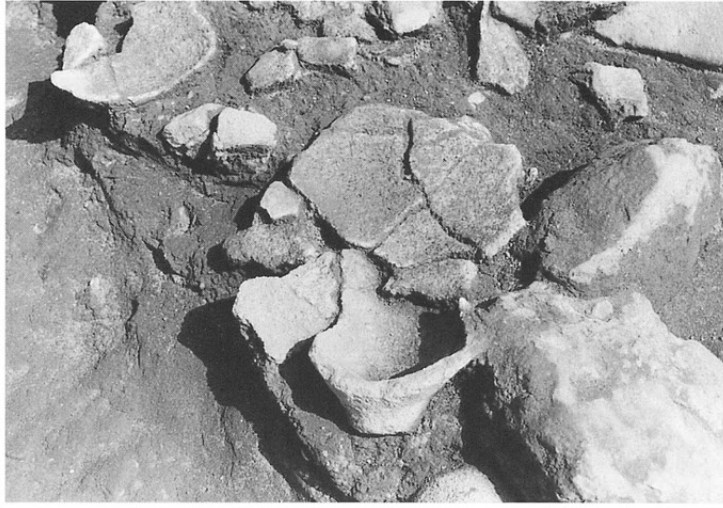


③ 1号住居跡遺物出土状況
近景



図版 7

1号住居跡遺物出土状況（その2）



図版 8

1号住居跡土層断面及び遺構検出状況



① 1号住居跡 東西土層断面



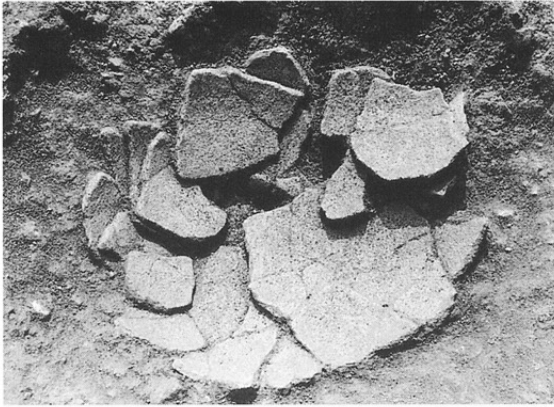
② 1号住居跡 土層断面近景



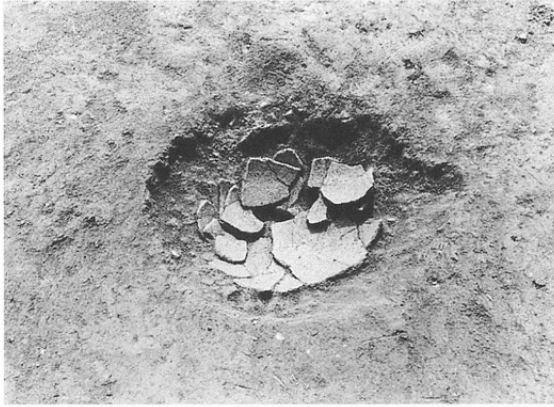
③ 1号住居跡 全景



2号土坑及び3号土坑遺物出土状況、遺構検出状況



① 2号土坑遺物出土状況



② 2号土坑遺物出土状況



③ 3号土坑遺物出土状況



④ 3号土坑遺構検出状況



図版 10

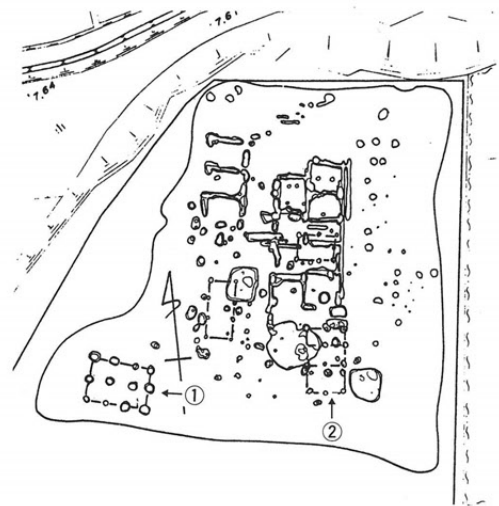
4号掘立柱建物、5号掘立柱建物



① 4号掘立柱建物



② 5号掘立柱建物

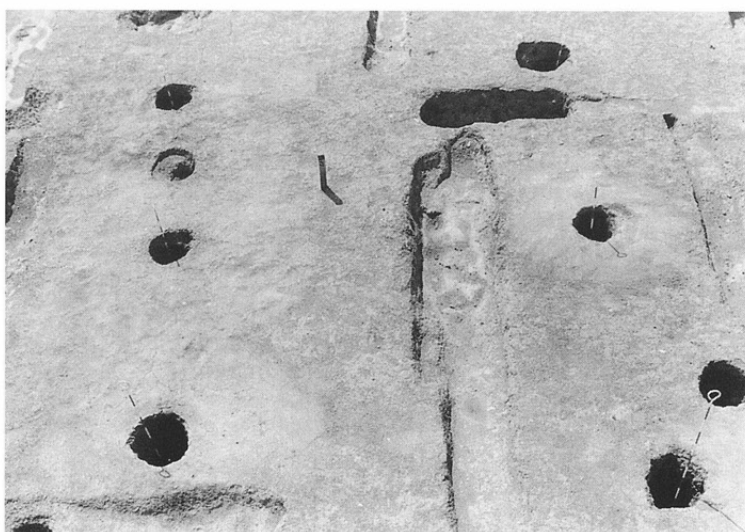


图版 11

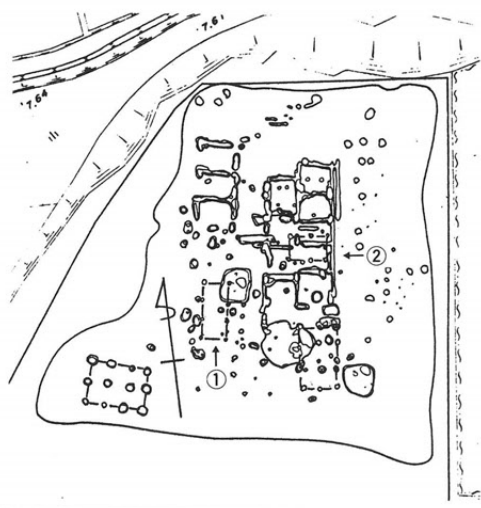
6号掘立柱建物、7号掘立柱建物



① 6号掘立柱建物

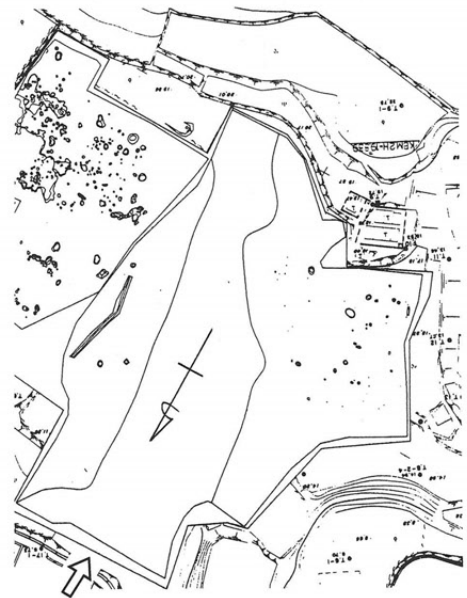


② 7号掘立柱建物



图版 12

C地区全景

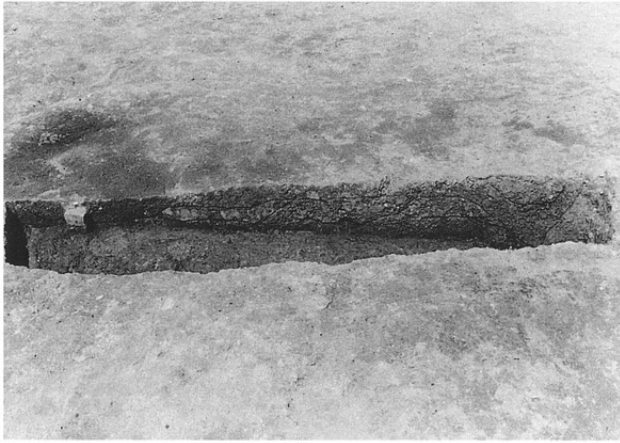


图版 13

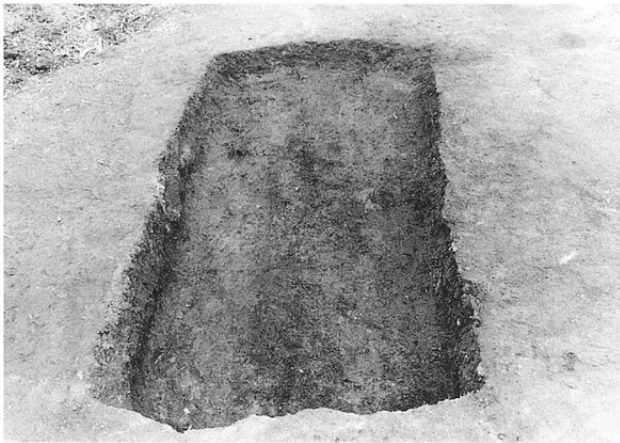
近代墓跡土層断面及び遺構検出状況



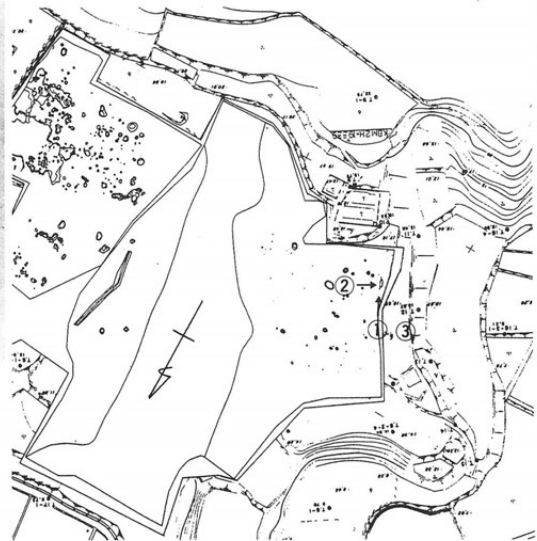
①近代墓跡プラン検出状況



②近代墓跡南北土層断面



③近代墓跡遺構検出状況



図版 14

谷筋土層断面検出状況



①谷筋土層断面(その1)

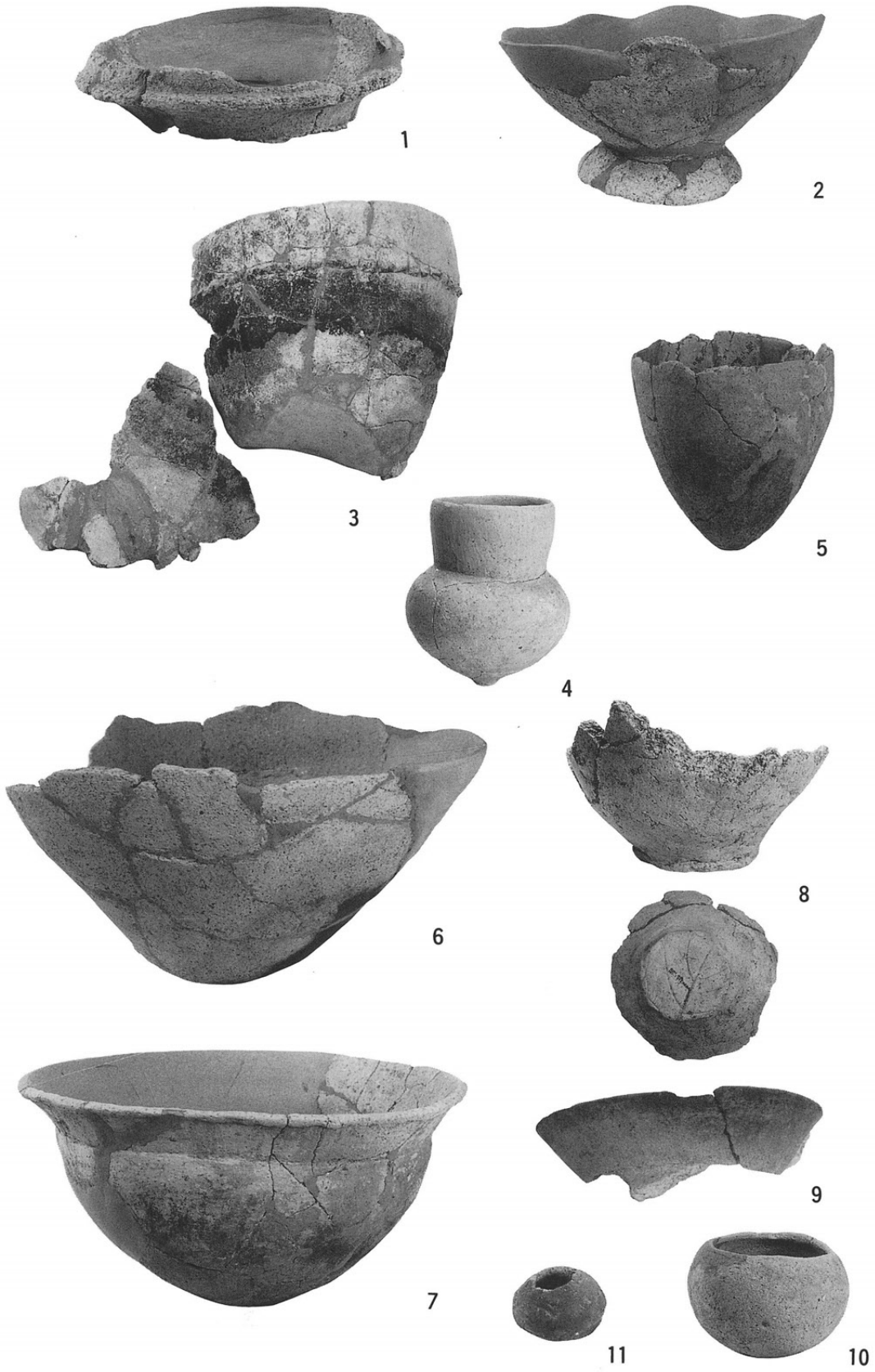


②谷筋土層断面(その2)



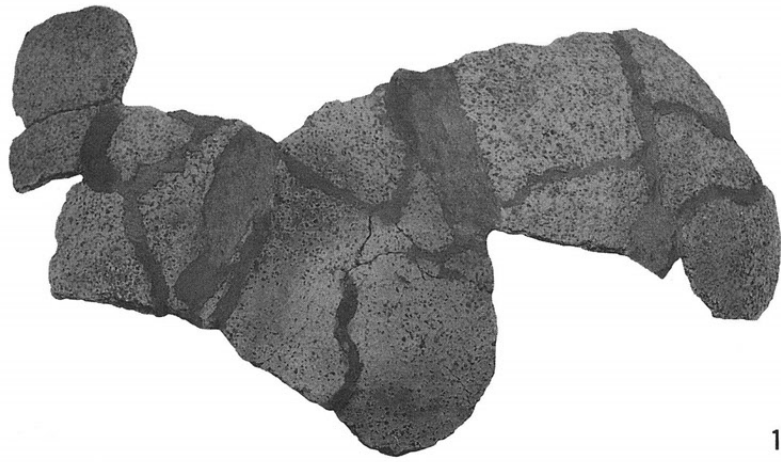
図版 15

A地区出土遺物（1号土坑他）



图版 16

B地区出土遺物（その1：2号、3号土坑及び1号住居跡他）



12



14



17



18



20



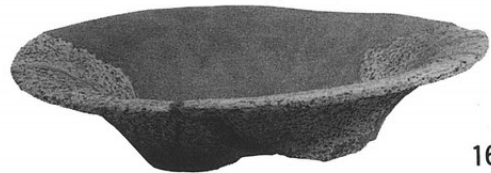
13



15



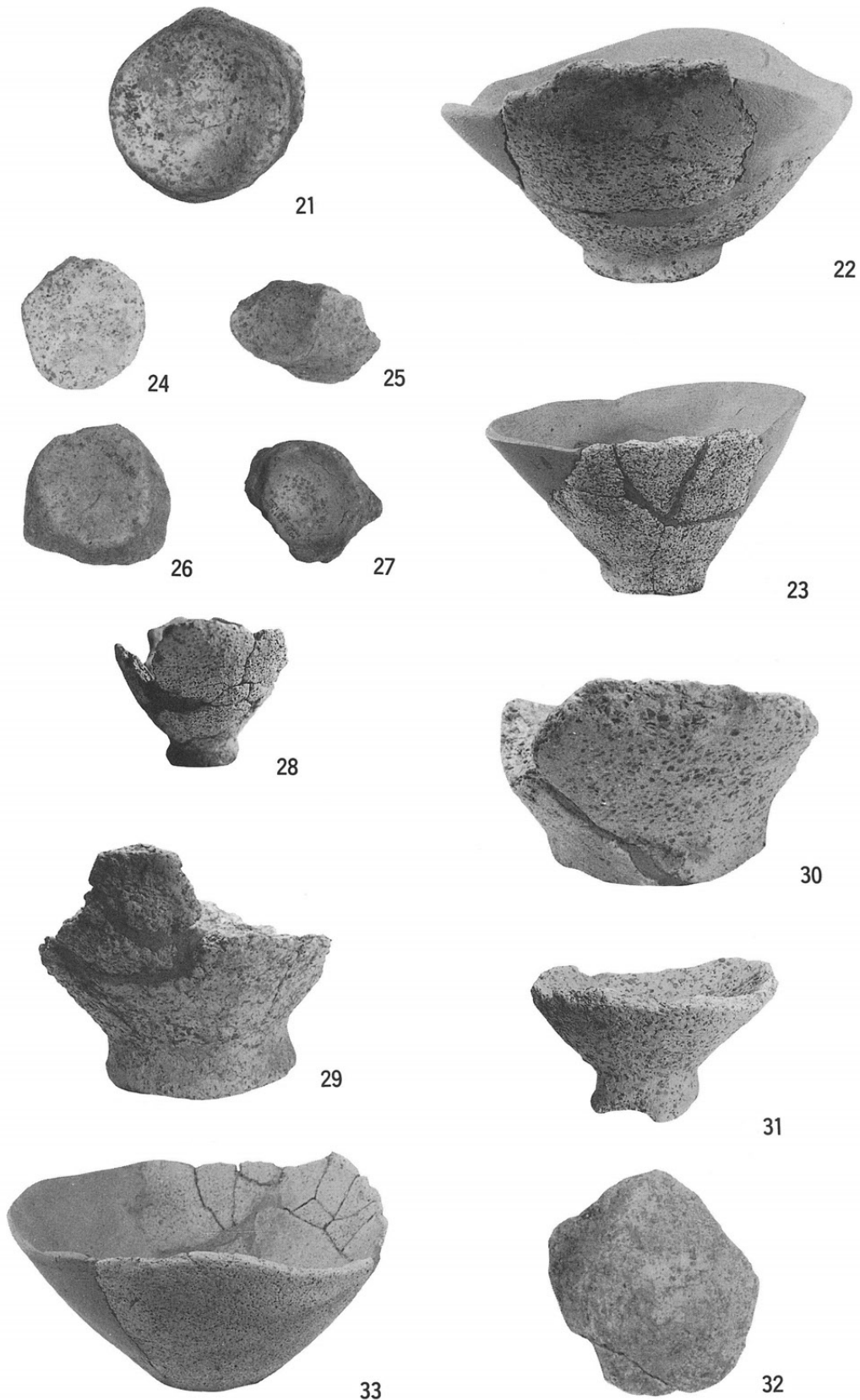
19



16

図版 17

B地区出土遺物（その2：1号住居跡）



図版 18

B地区出土遺物（その3：1号住居跡）



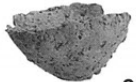
34



38



35



36



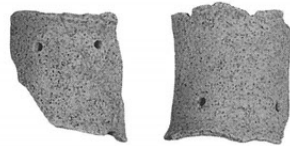
37



39



40



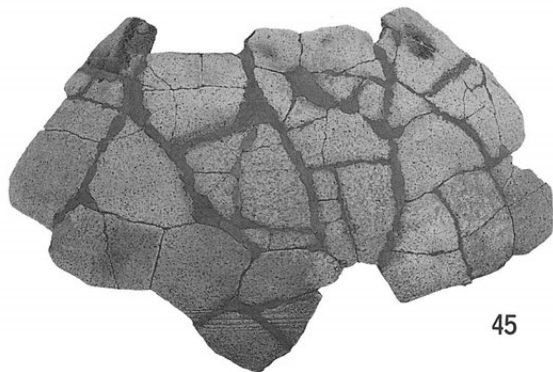
41



42



44



45

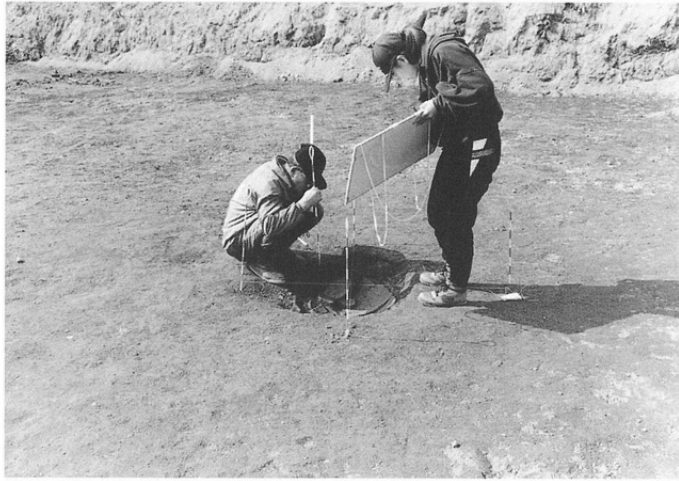


43

図版 19

作業風景、遺跡現地説明会の様子

①作業風景



②作業風景



③遺跡現地説明会の様子



〈調査スタッフ〉



黒木正男 鎌田和枝 大田原俊太郎 須志田修 (中部病院にて)
鎌田留次郎 前田マサ子 福田スエ 黒木カヨ 田畑フミ子

〈整理スタッフ〉



貴島芳栄

谷口キヨ子

(伊東記念館にて)

報 告 書 抄 録

ふりがな	おおぞのいせき							
書名	大園遺跡							
副書名	—							
巻次	—							
シリーズ名	日南市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第9集							
編著者名	的場文明							
編集機関	日南市教育委員会							
所在地	〒887-8585 宮崎県日南市中央通1丁目1番地1 ☎ 0987-31-1145 FAX 0987-24-0987							
発行年月日	西暦1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査機関 調査日	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおぞのいせき 大園遺跡	にちなんしおおぞ 日南市大字 かみかたあざおおぞの 上方字大園 1032番地3 他	45204	704	31° 33' 31"	131° 20' 50"	平成8年 1月26日 同年 7月8日	13,000	農村資源活用農業構造改善事業日南市都市農村交流センター建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
大園遺跡	散布地	弥生時代	弥生時代住居跡 1軒 土坑 3基 堀立柱建物 7棟	弥生土器 須恵器 陶磁器 石皿 打製石斧	大園遺跡は申請及び諸届出等の段階では「柿ノ木平遺跡」としてきたが、小字名のとり違いで遺跡名が誤りであることが判明した。従って、報告書刊行にあたっては正式な小字名をとって大園遺跡とした。			

日南市埋蔵文化財調査報告書 第9集

おお ぞの い せき
大 園 遺 跡

農村資源活用農業構造改善事業日南市都市農村交流
センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1998年3月

編集発行 日南市教育委員会
〒887-8585 日南市中央通1丁目1番地1
電 話 0987-31-1145

印 刷 (名) 鈇 肥 印 刷
〒889-2514 日南市鈇肥3丁目2番16
電 話 0987-25-1680